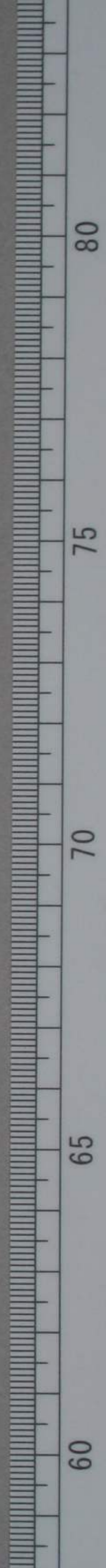


晝  
夜  
帶

竹久夢二作

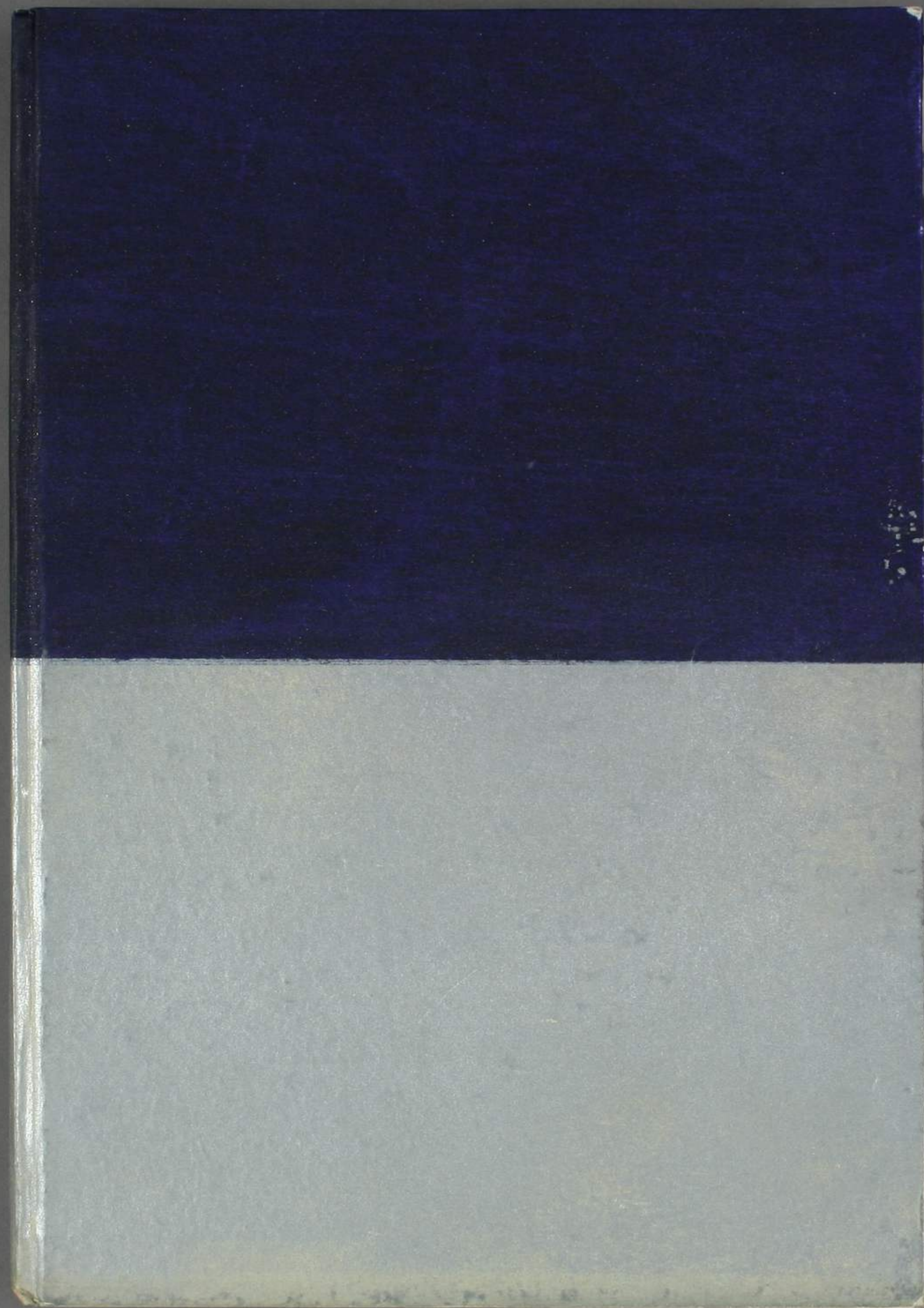
東京  
洛陽堂  
版

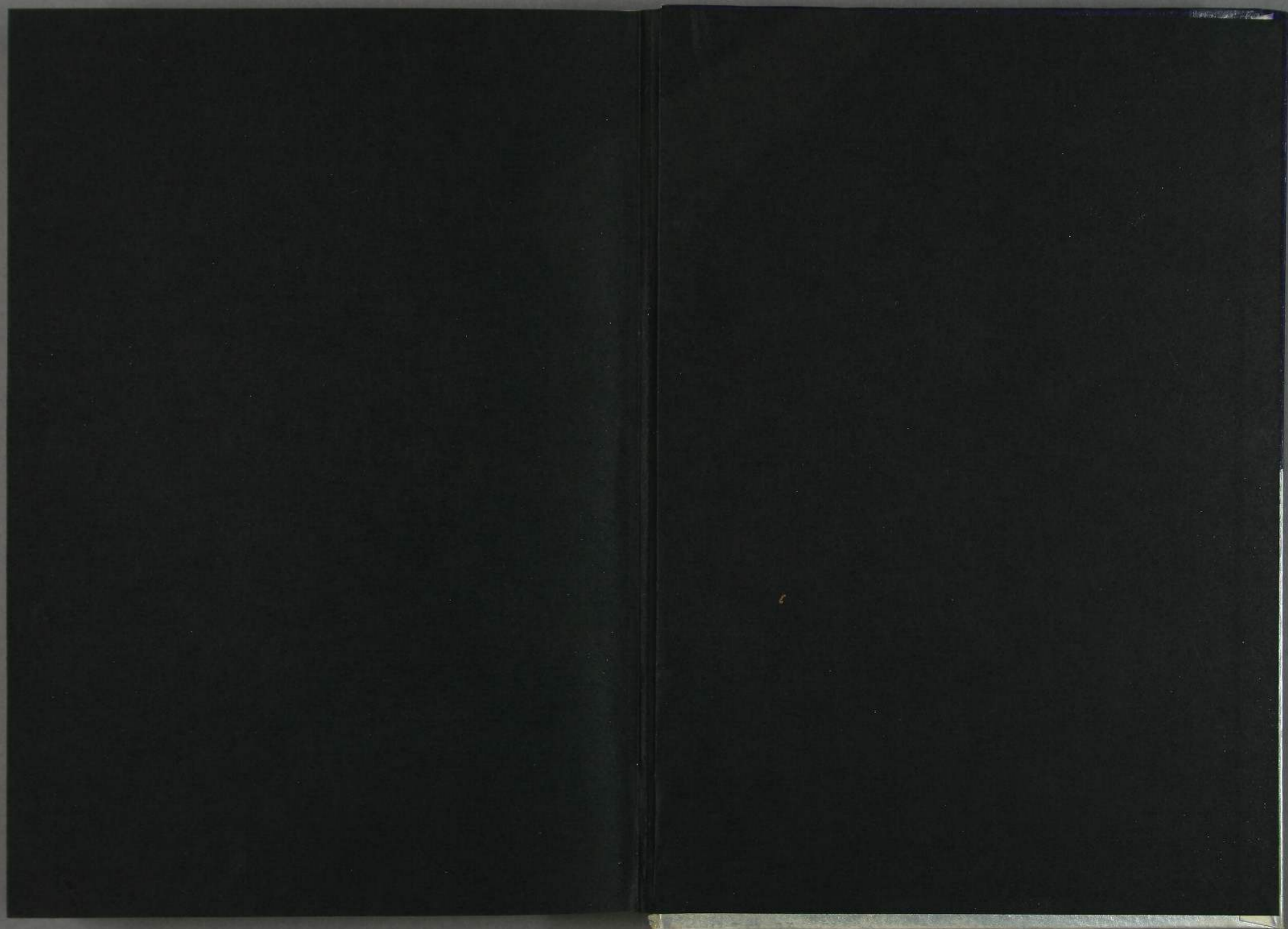


畫

夜

帶





晝夜帶



集 畫

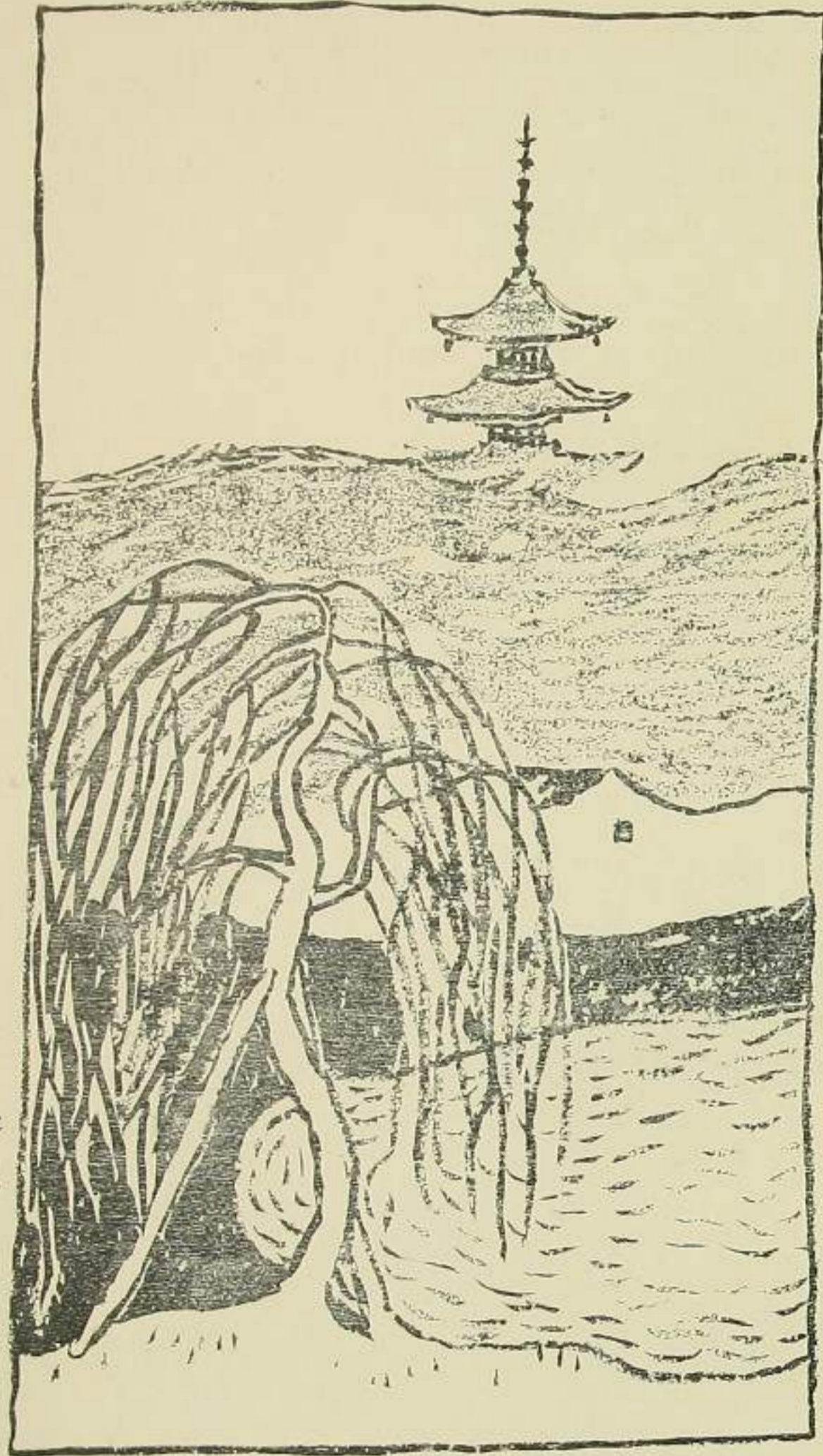
みぐめの陽太

作 二 夢 久 竹

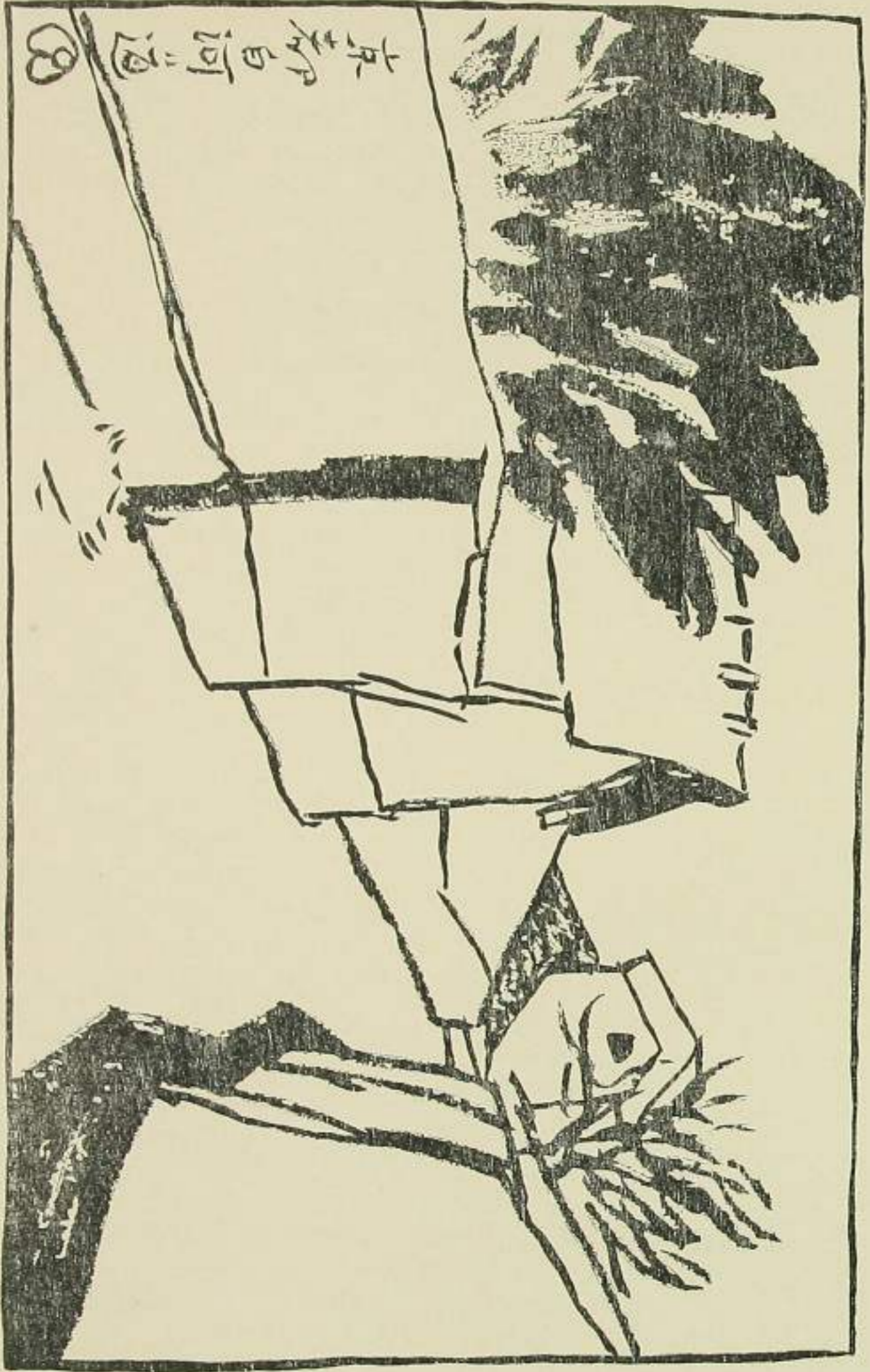


太閤のゆかり

二巻

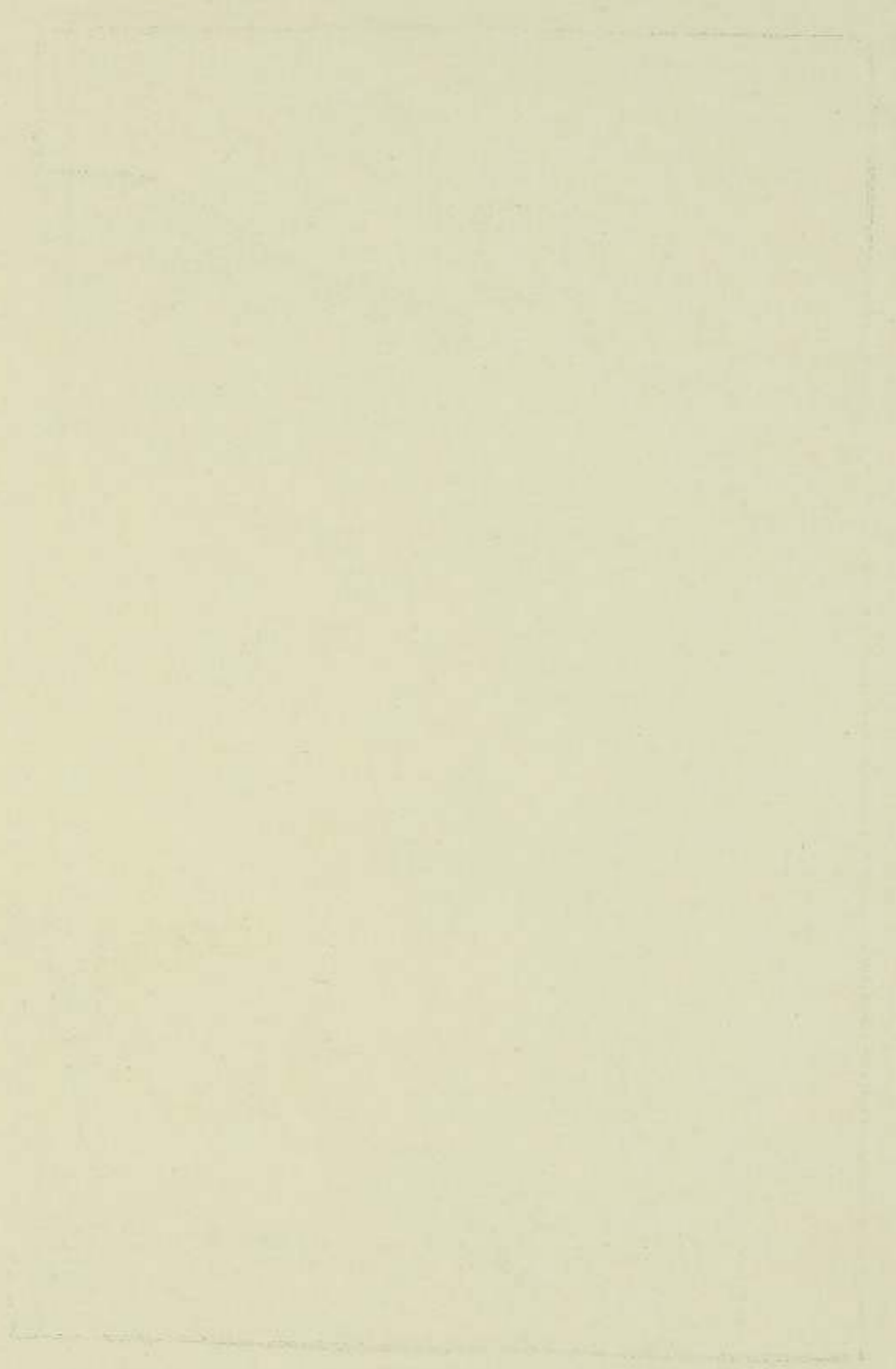
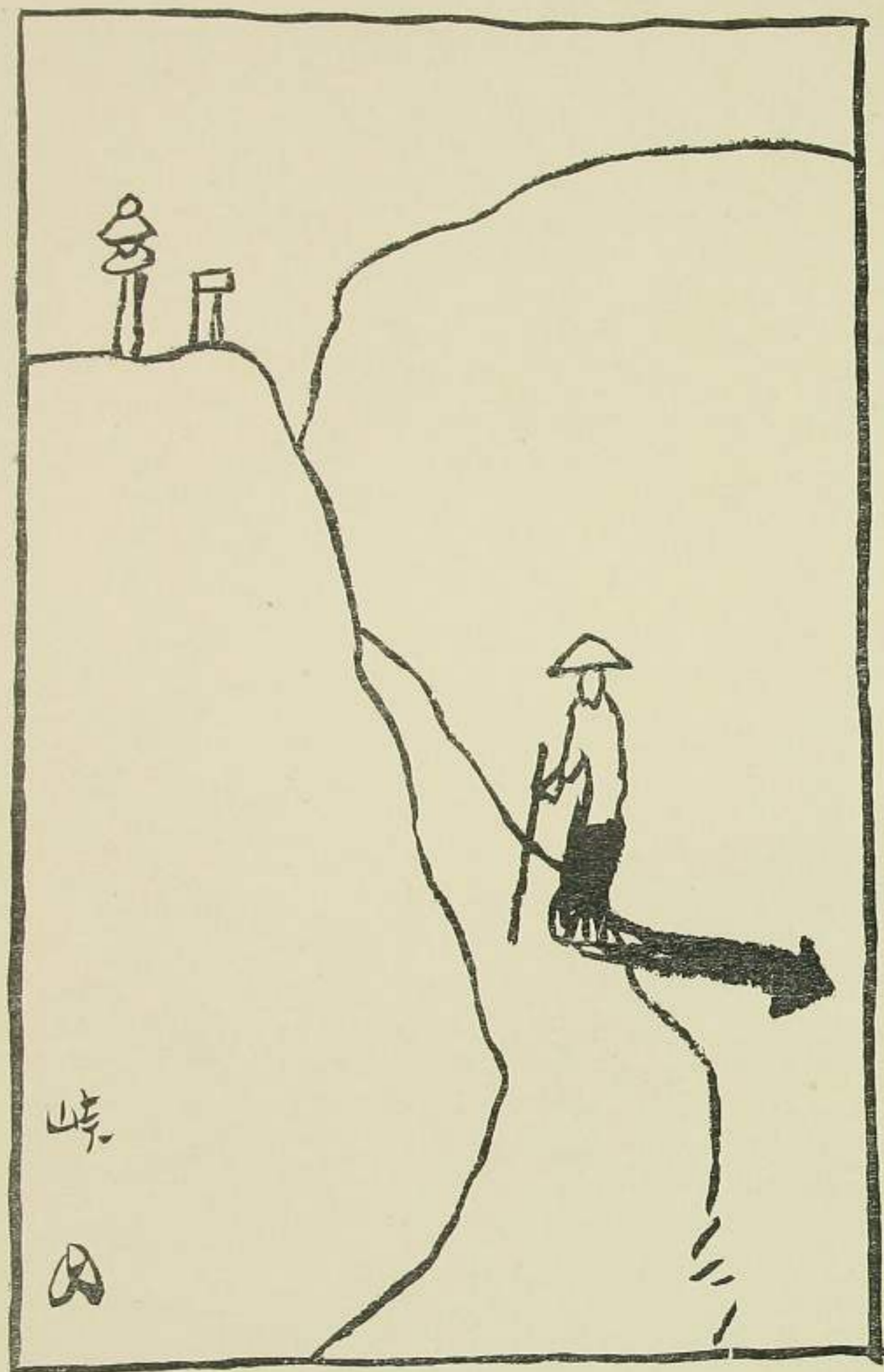


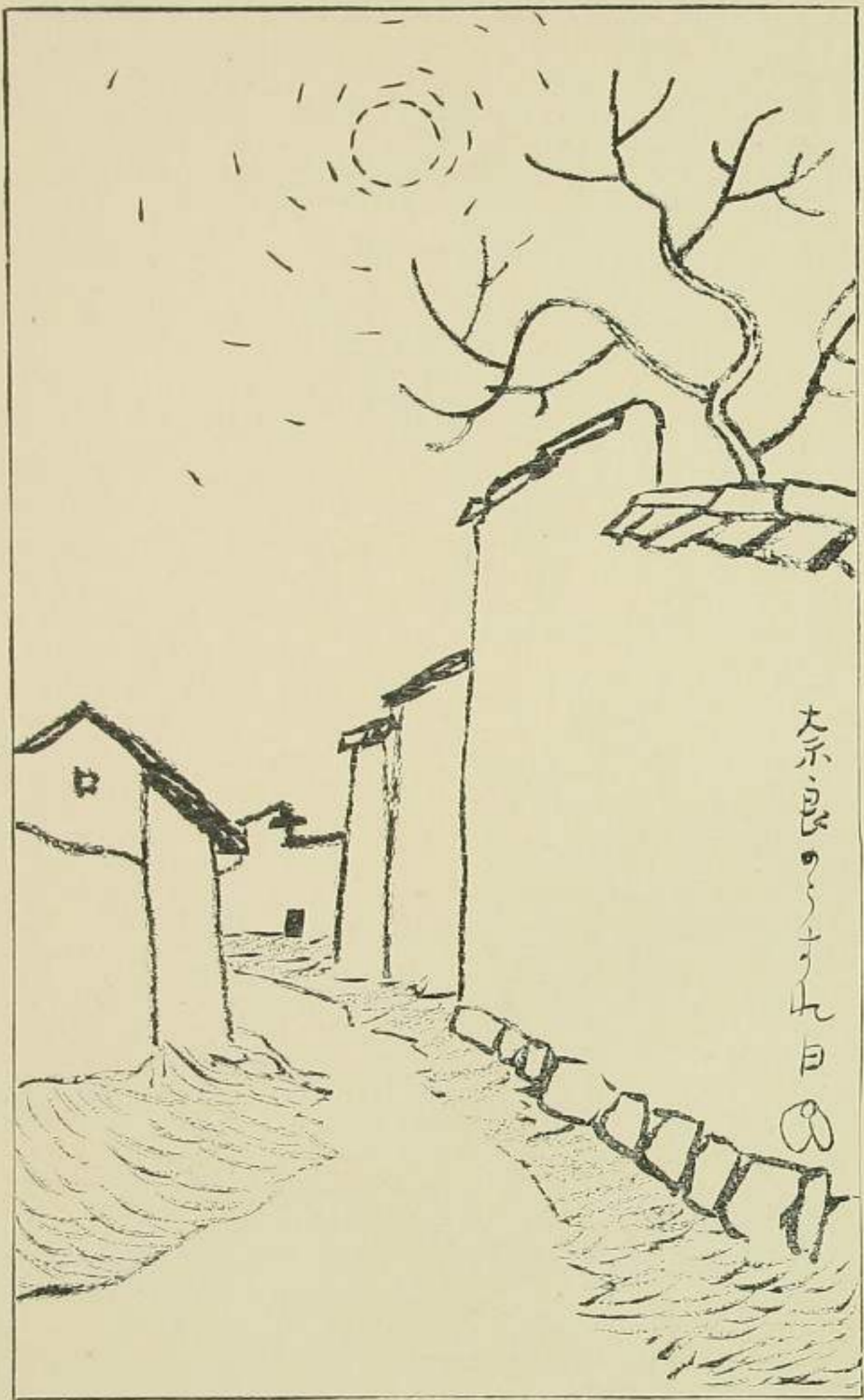
大正長  
猿澤の池  
⑨





湯治場一人  
②

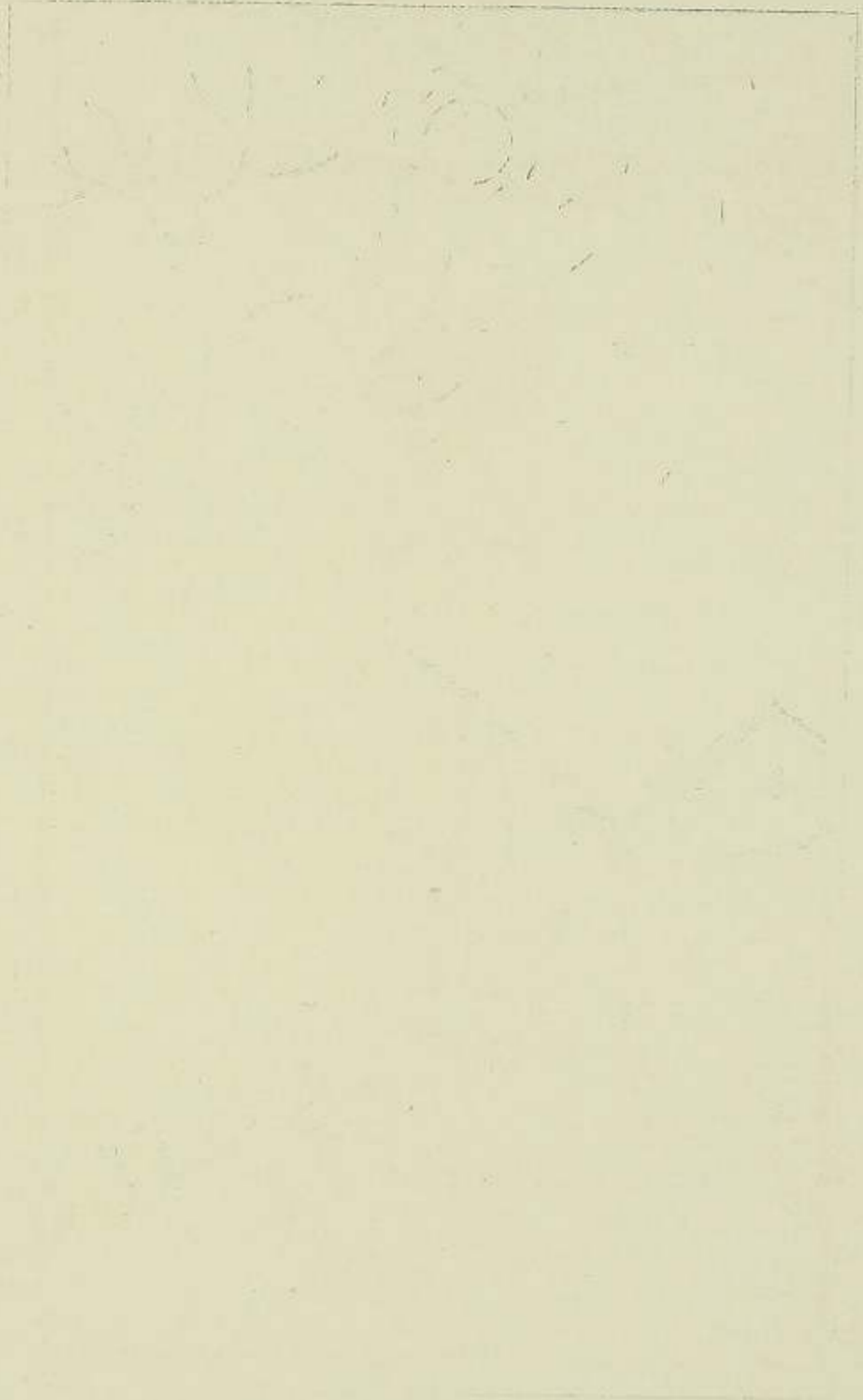




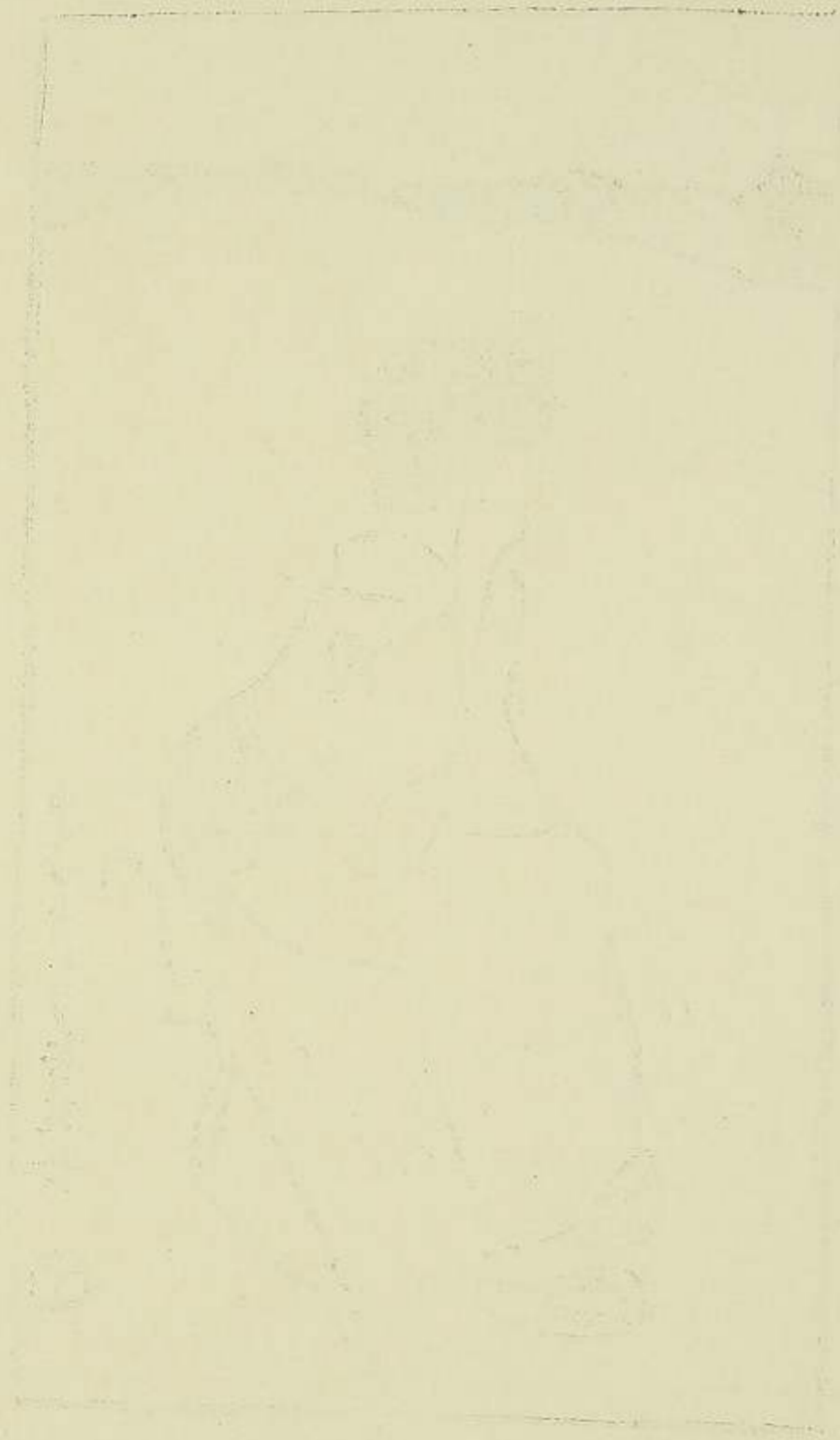
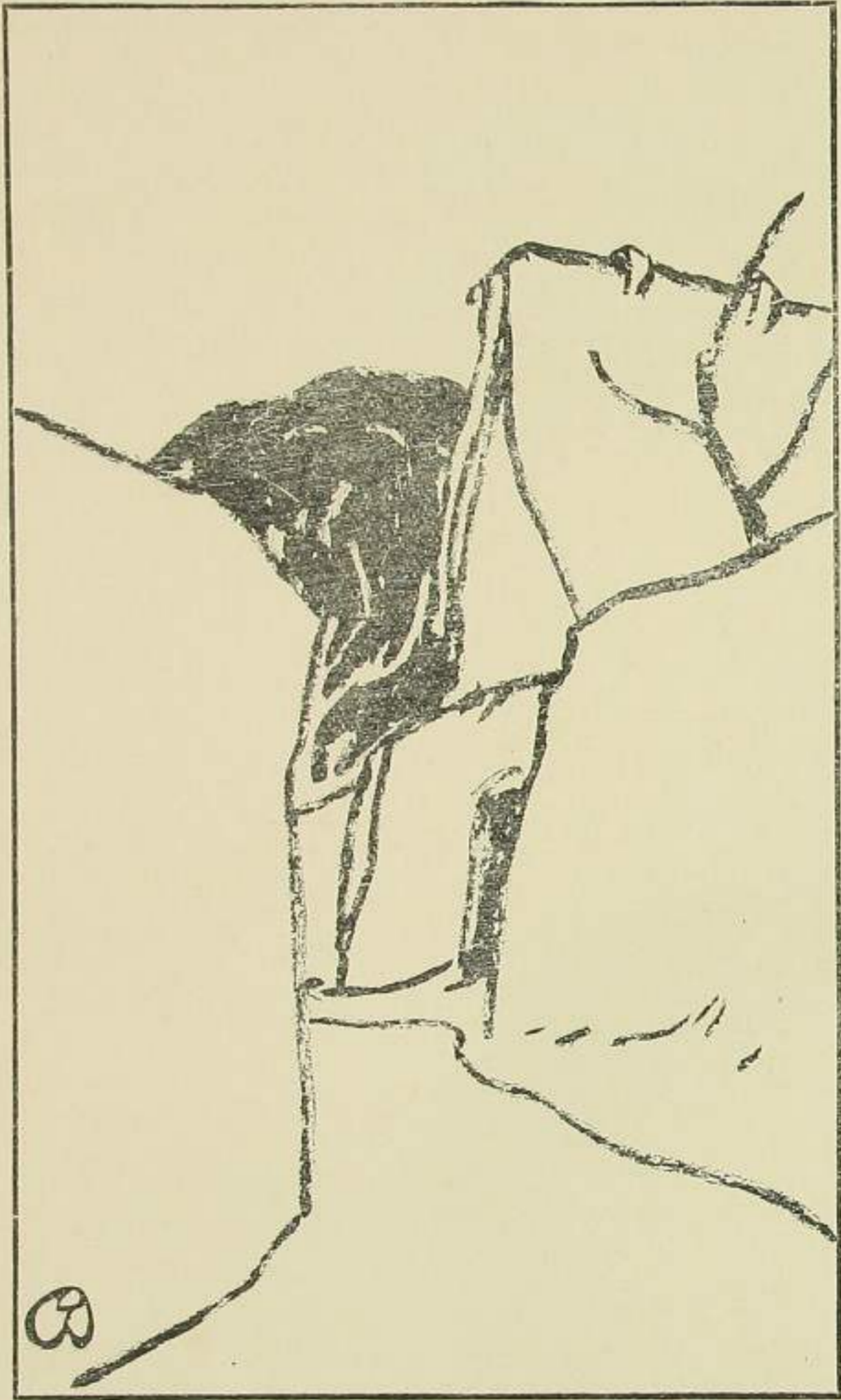
大正三年三月九日

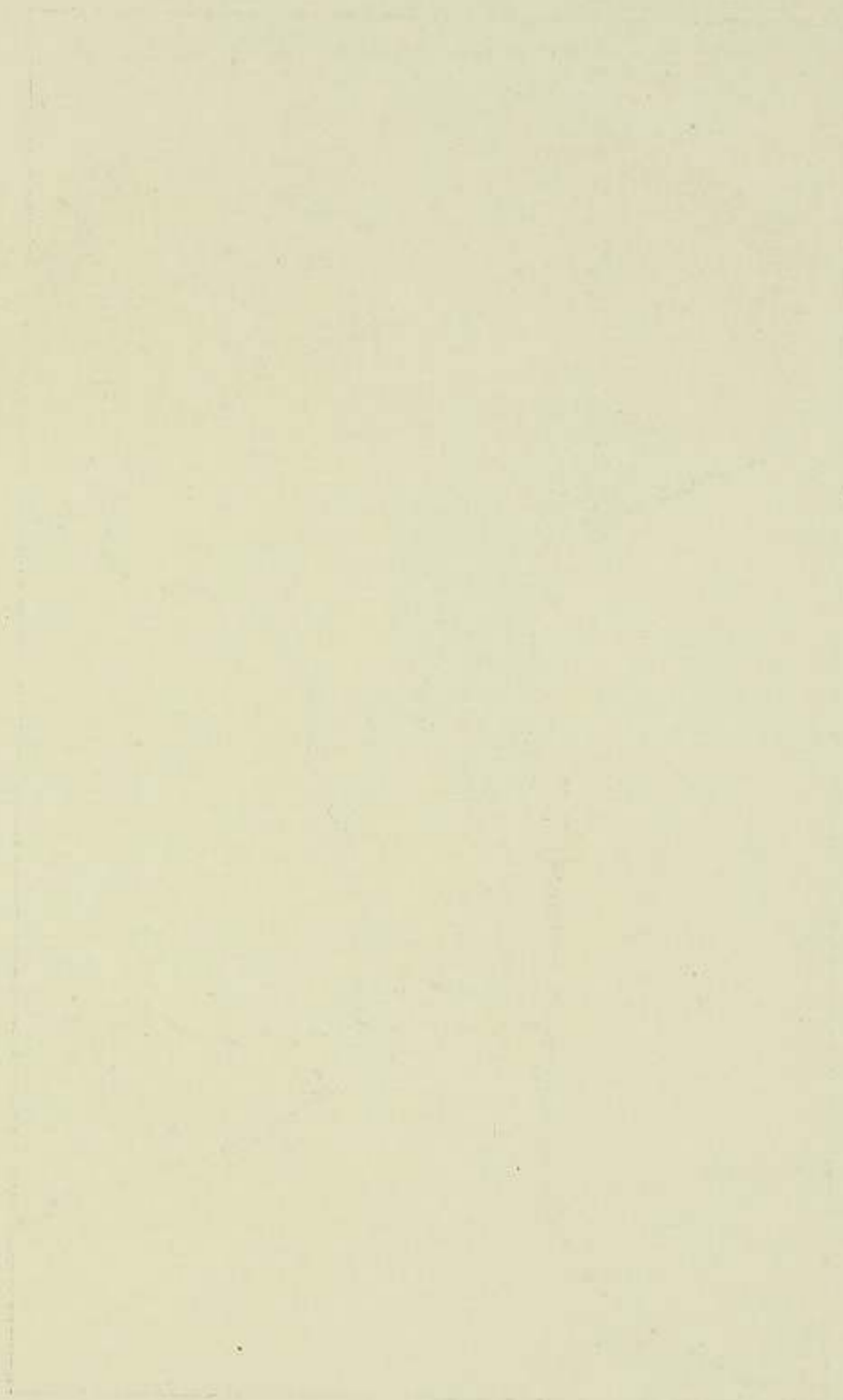
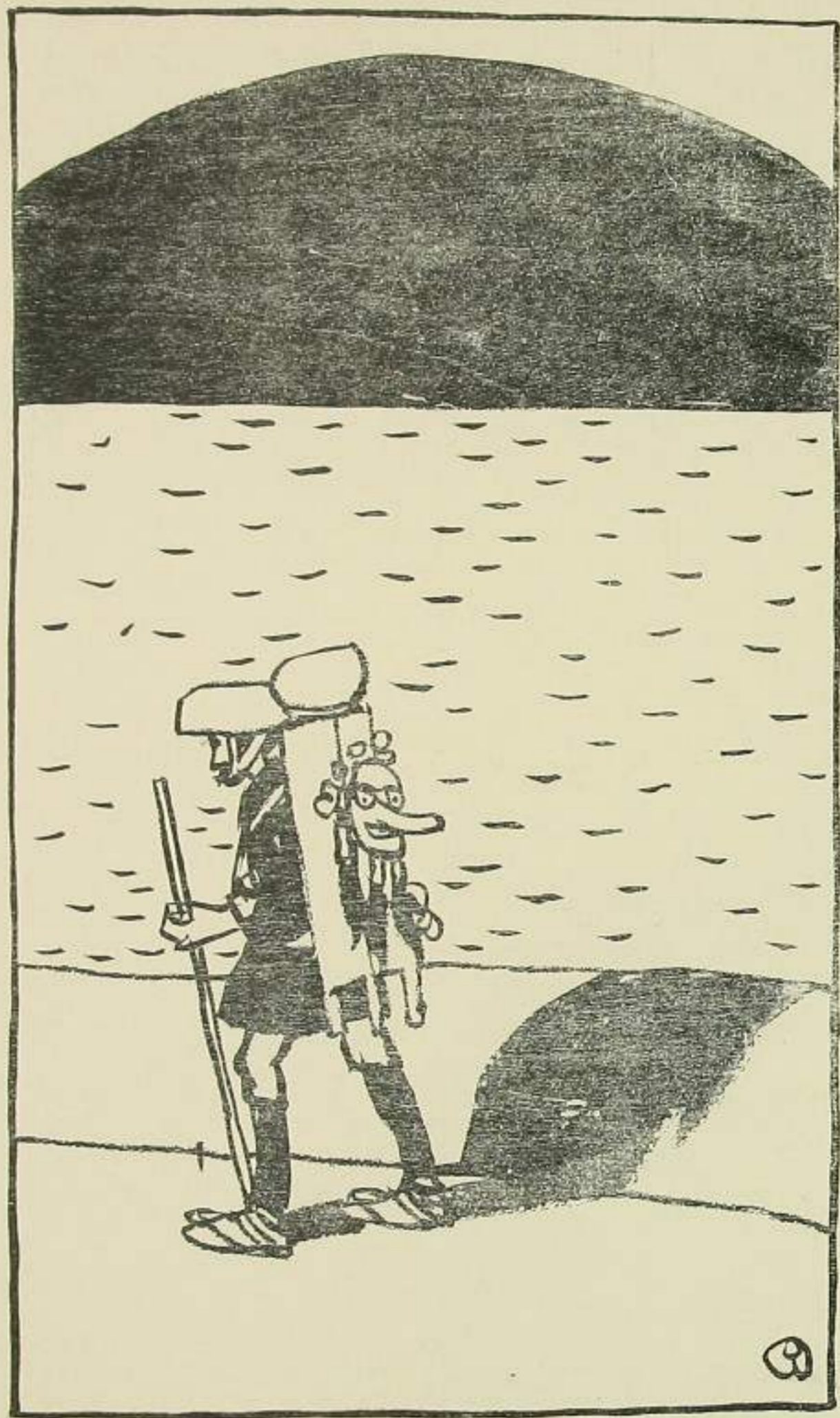


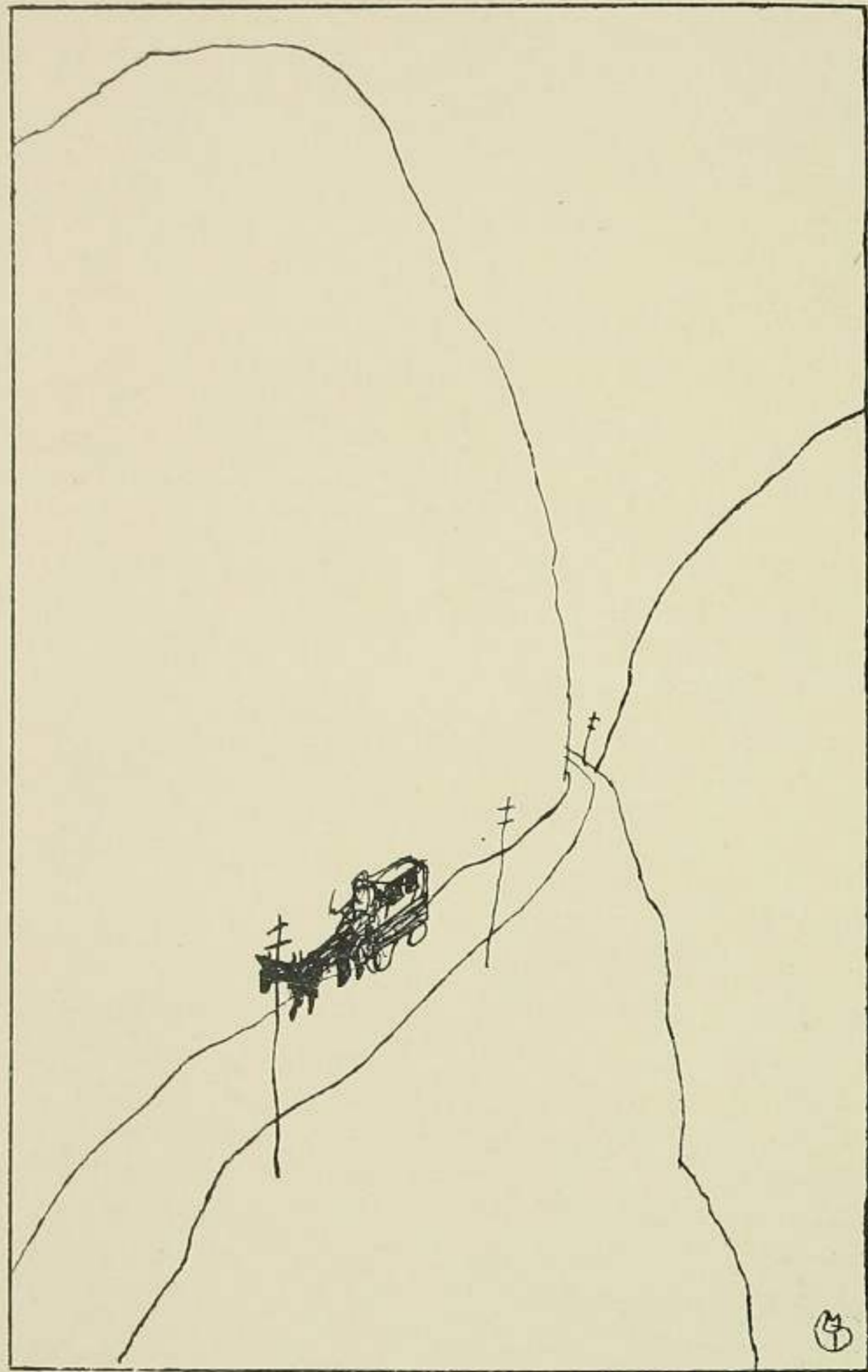
里子も見よき女 田









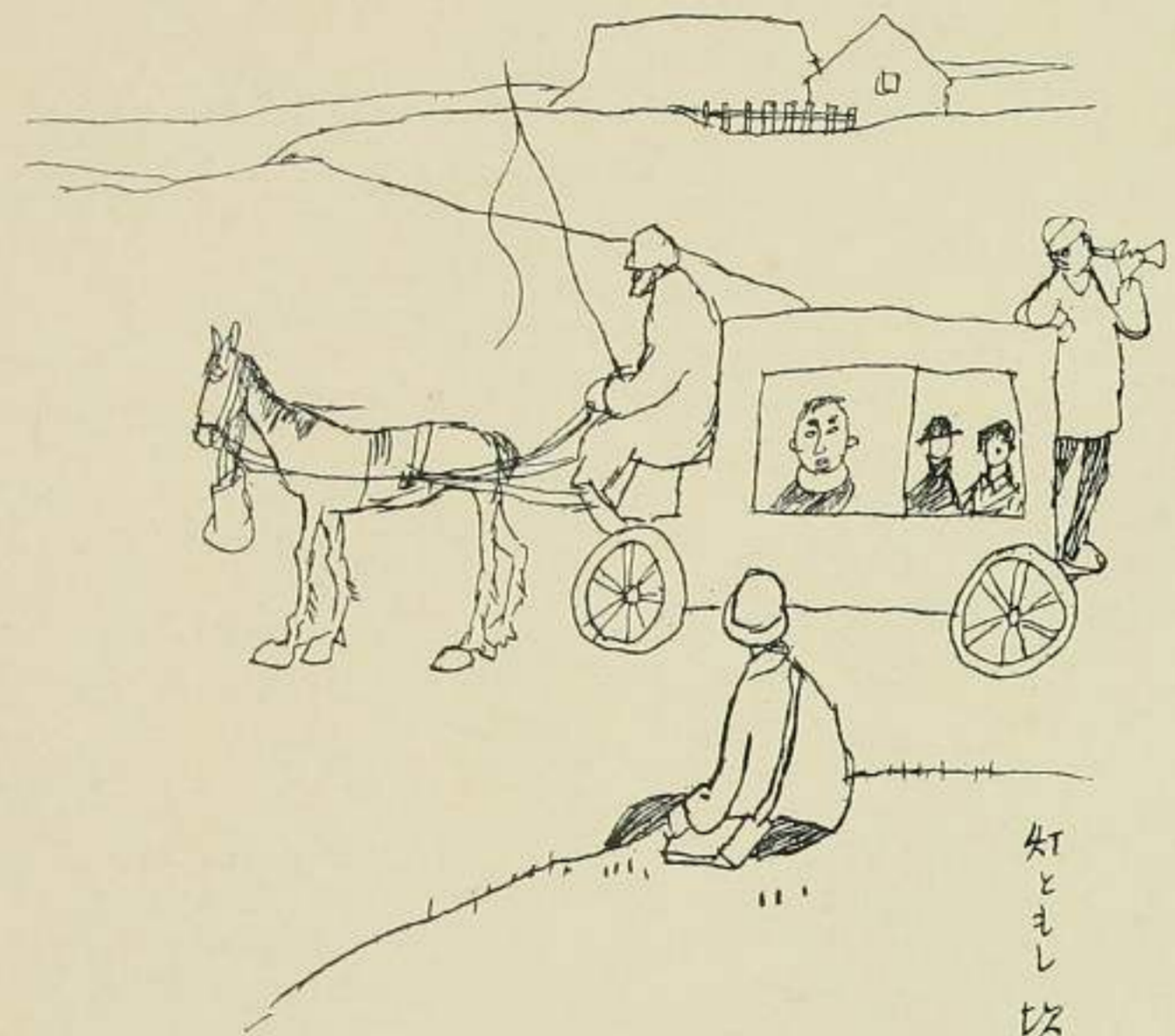




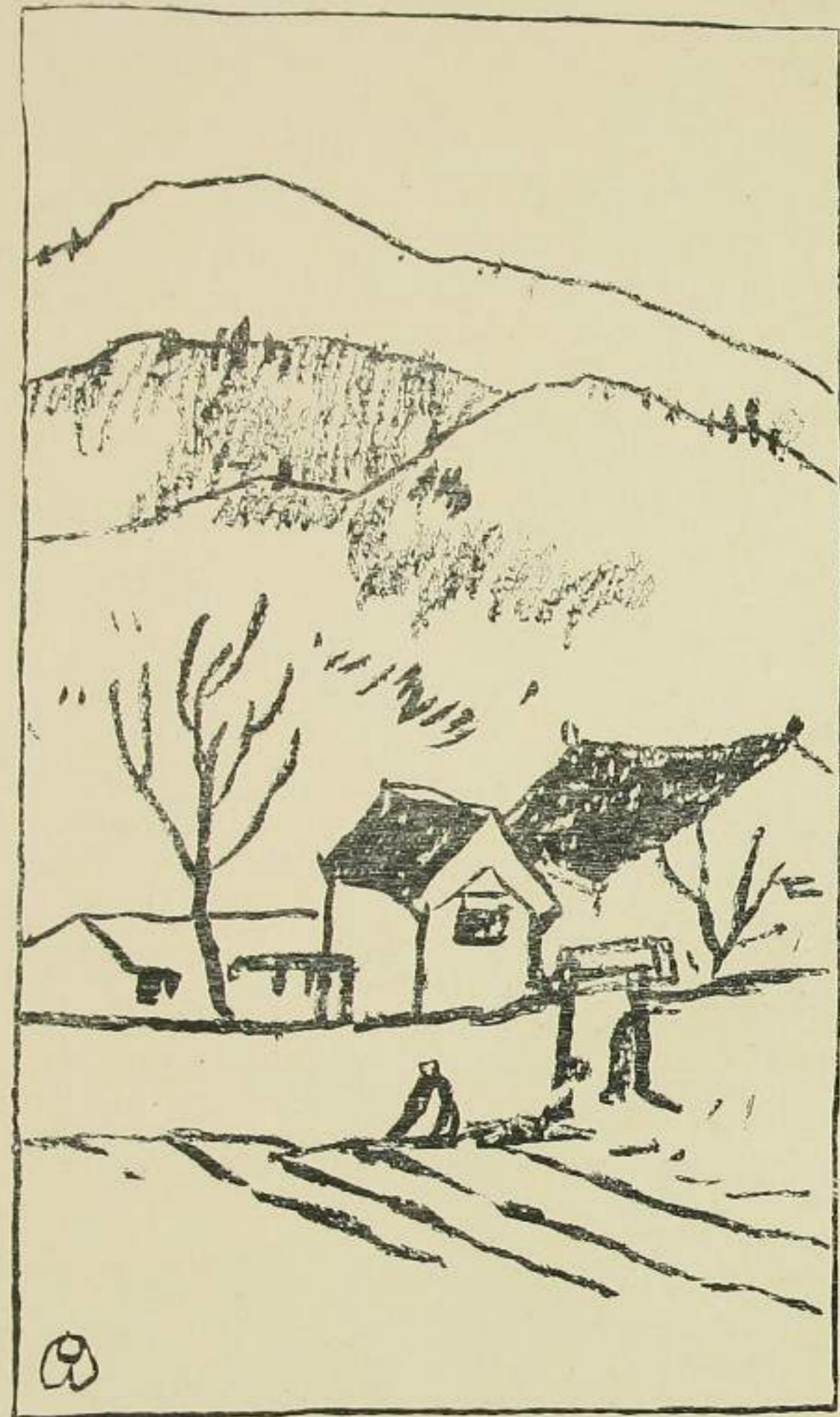
淀川竹助

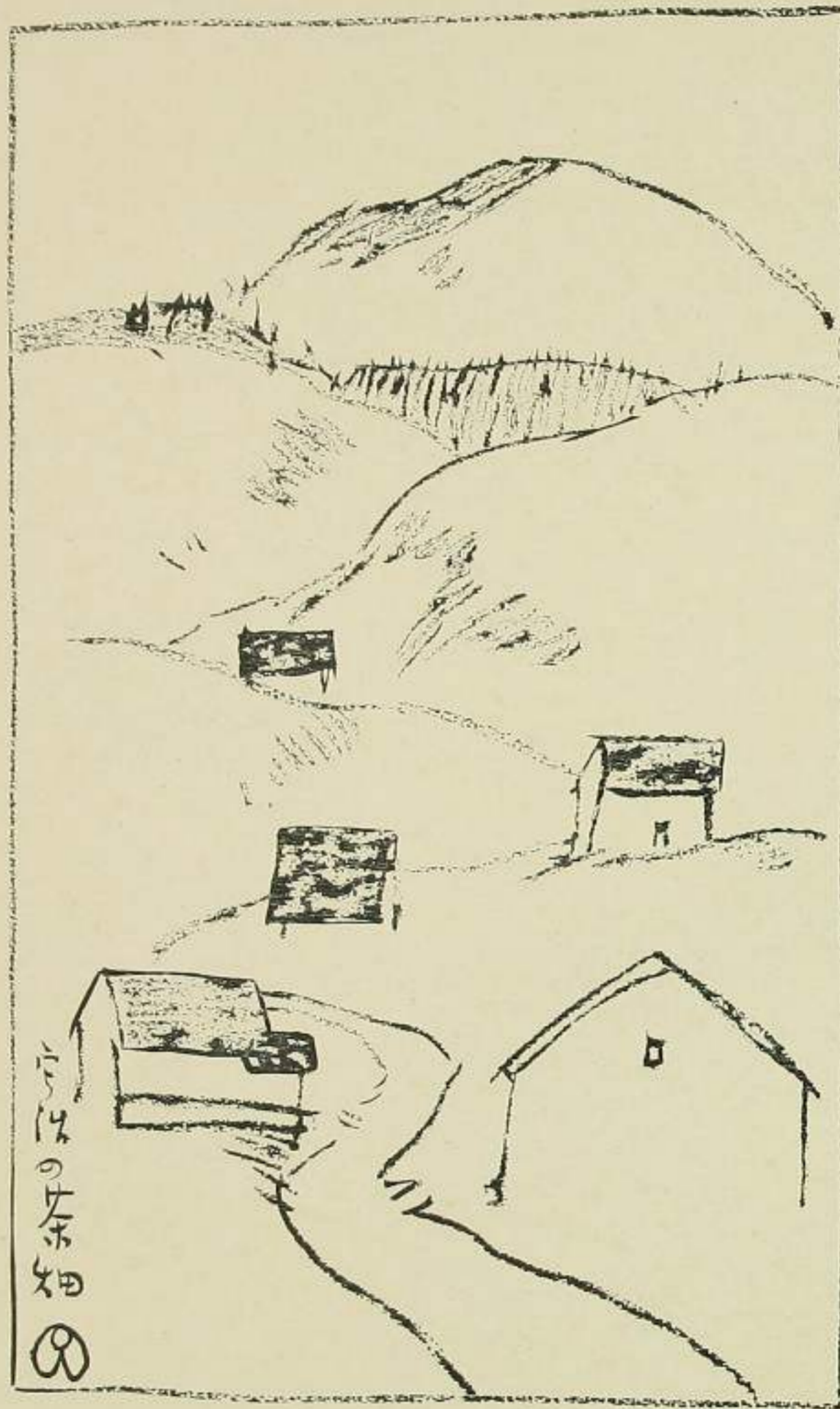


おまの  
オイヤシ  
と  
郭便  
脚夫

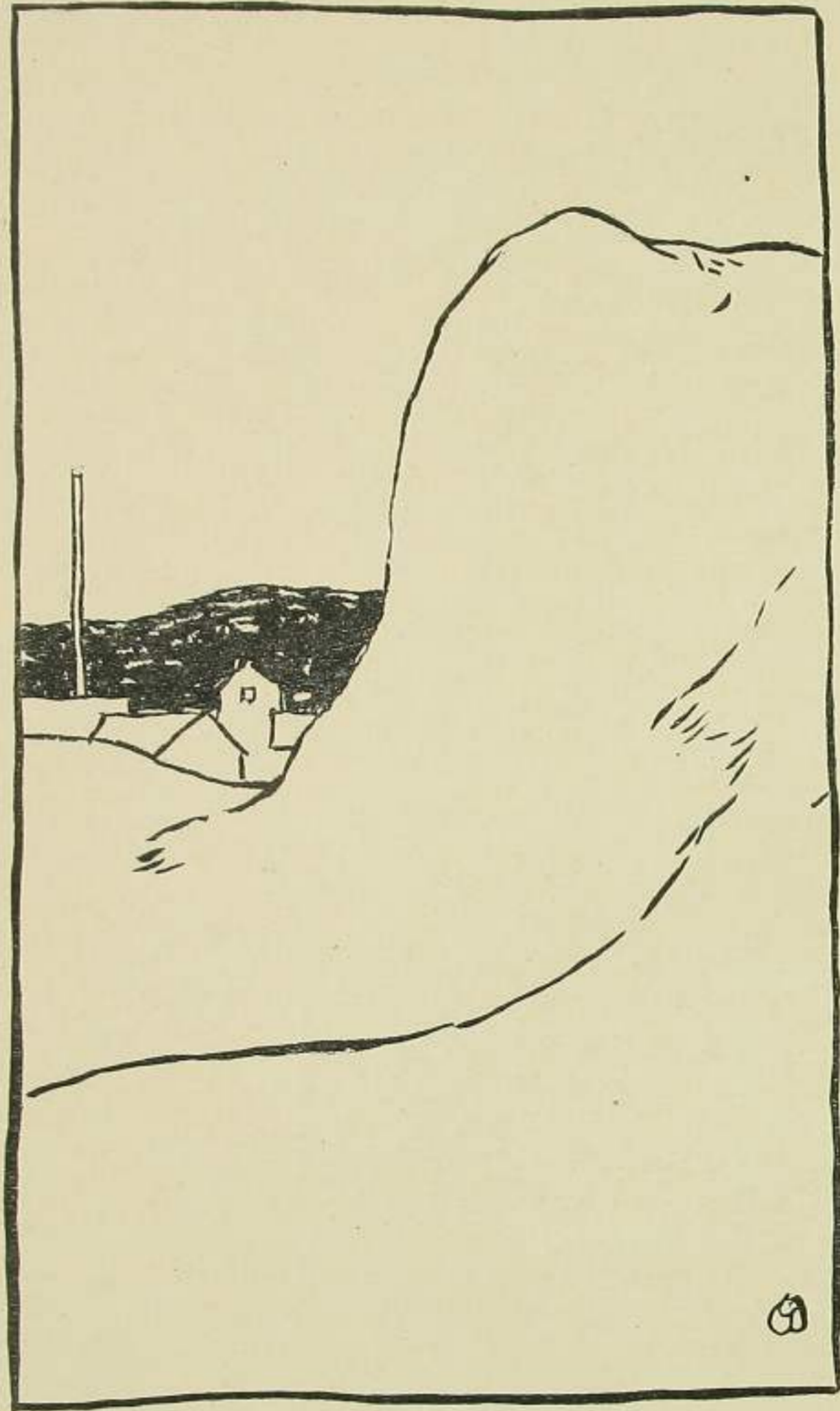


灯  
と  
も  
れ  
び  
ん

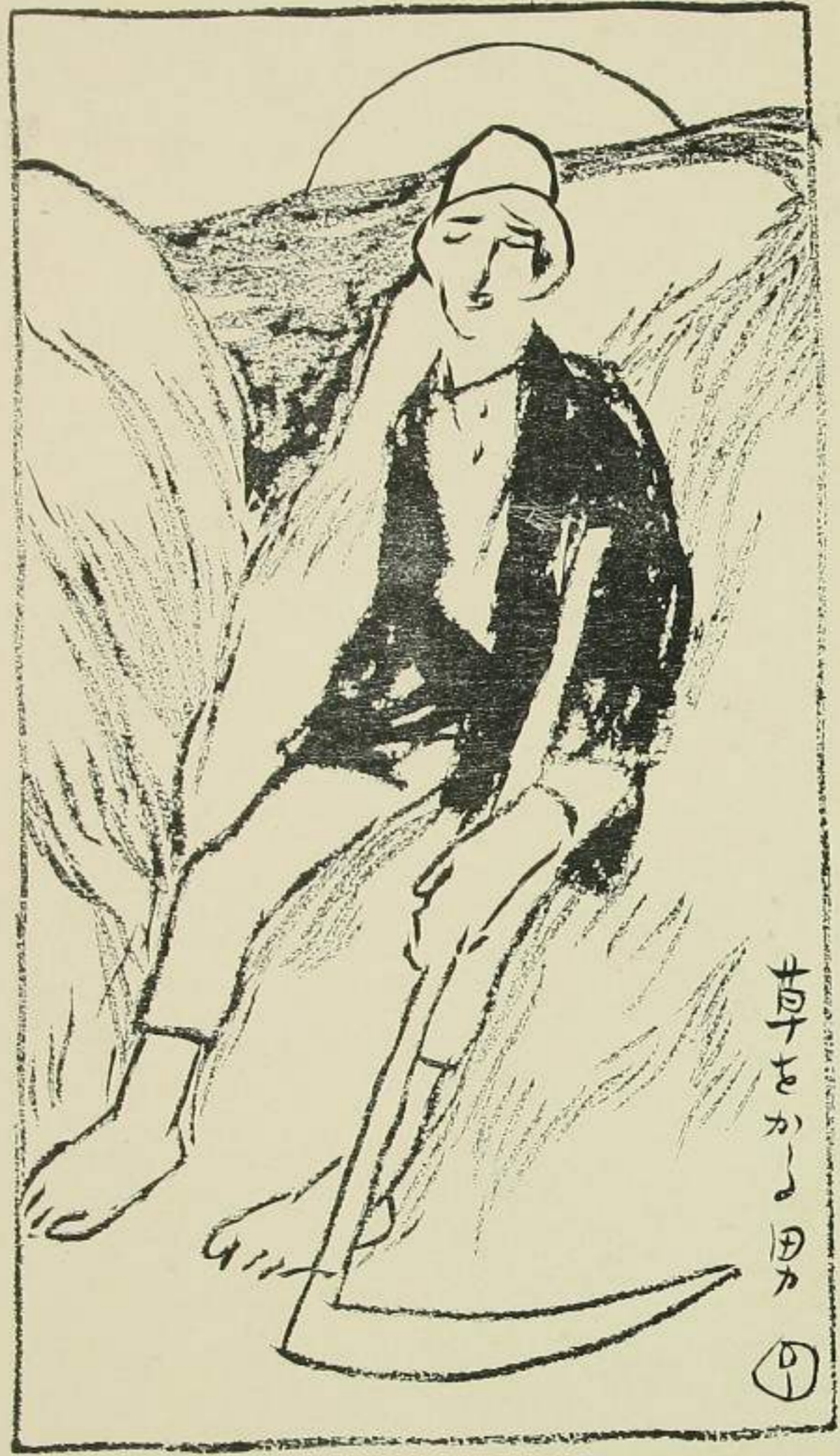




山崎の茶畑  
㊤

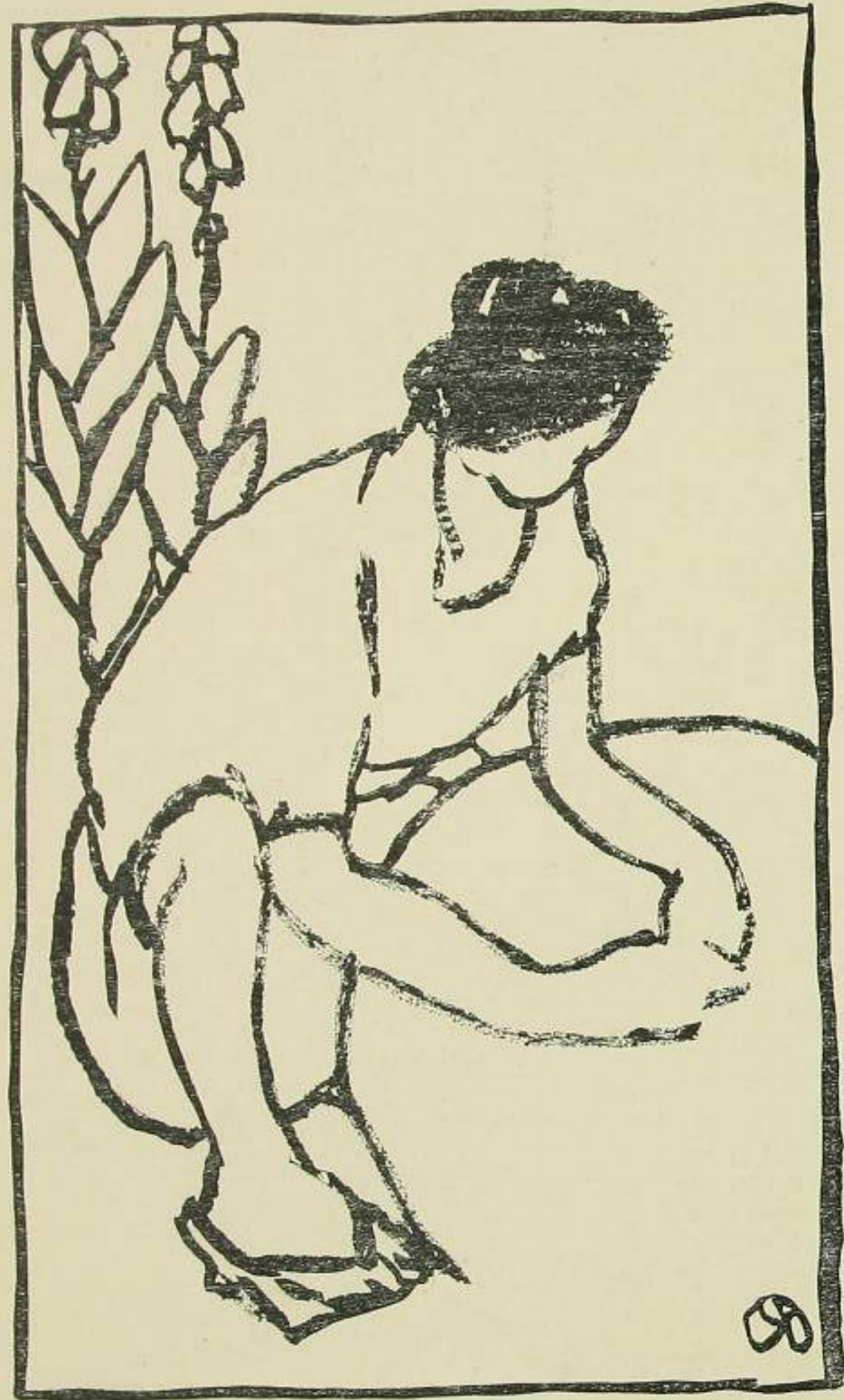








山の温泉宿 ①





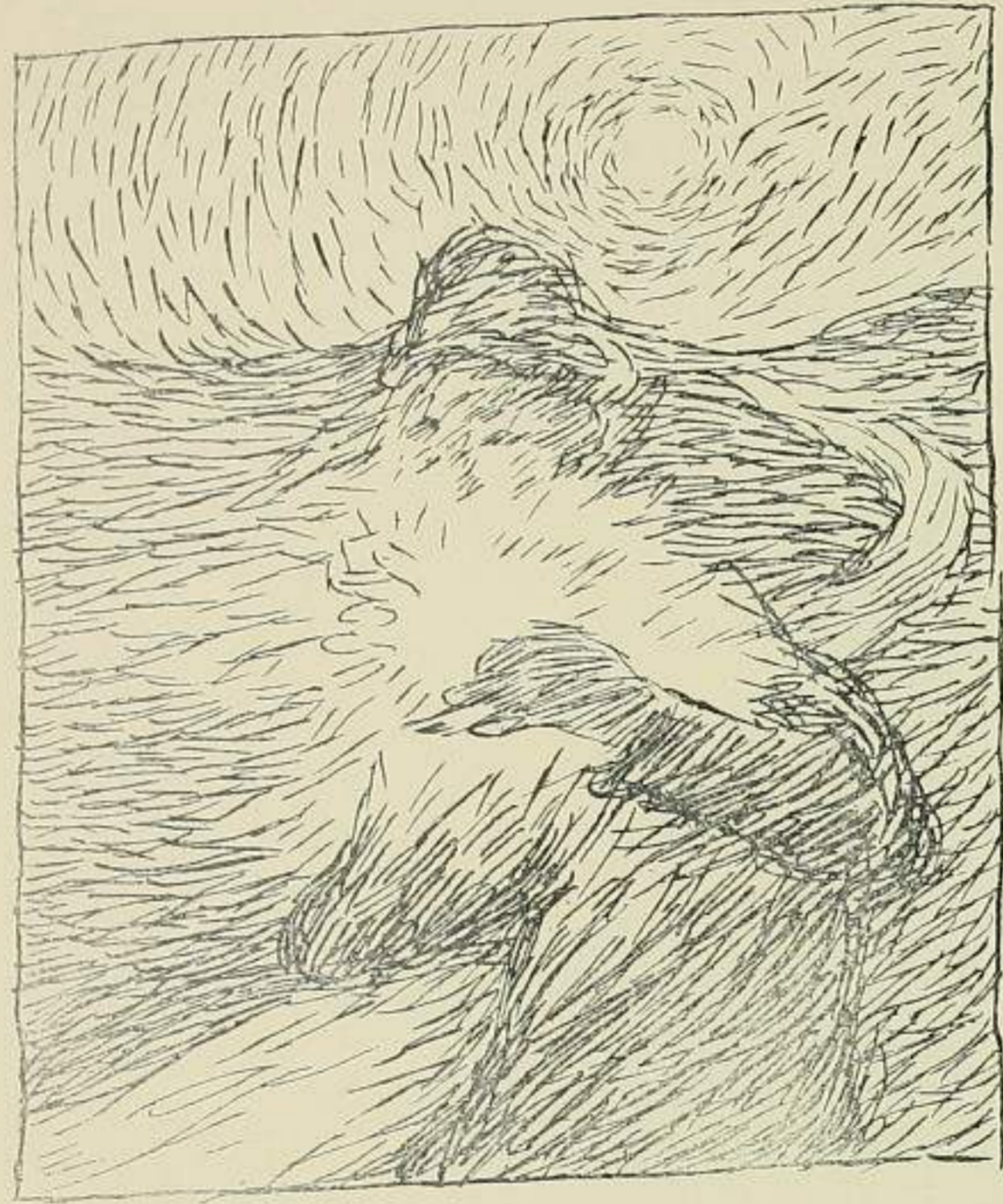


淀川  
の  
橋  
の  
傍  
に  
居  
る

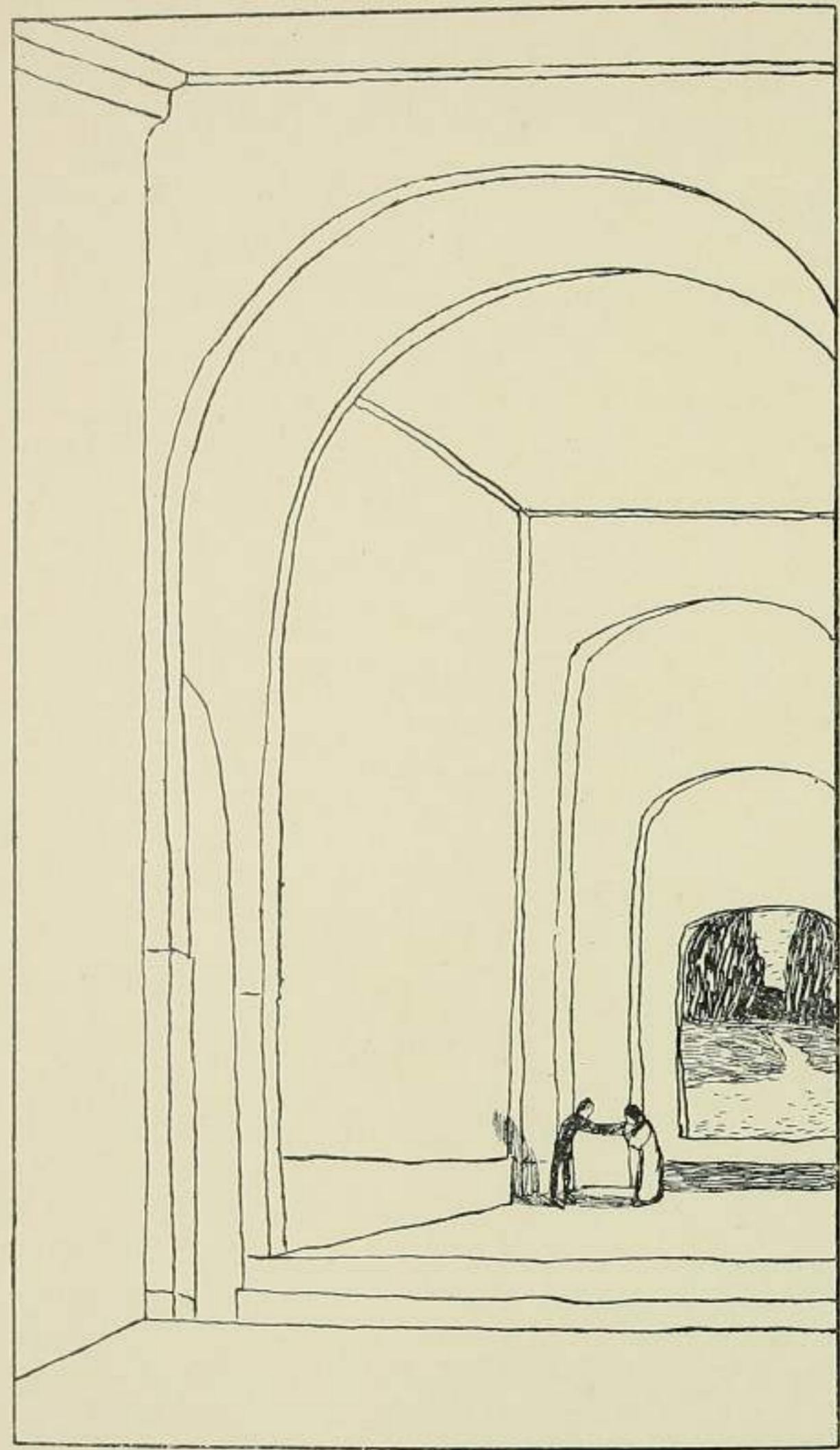
八月十七日



旅  
徒  
者  
と  
娘  
④



マウナロア  
①

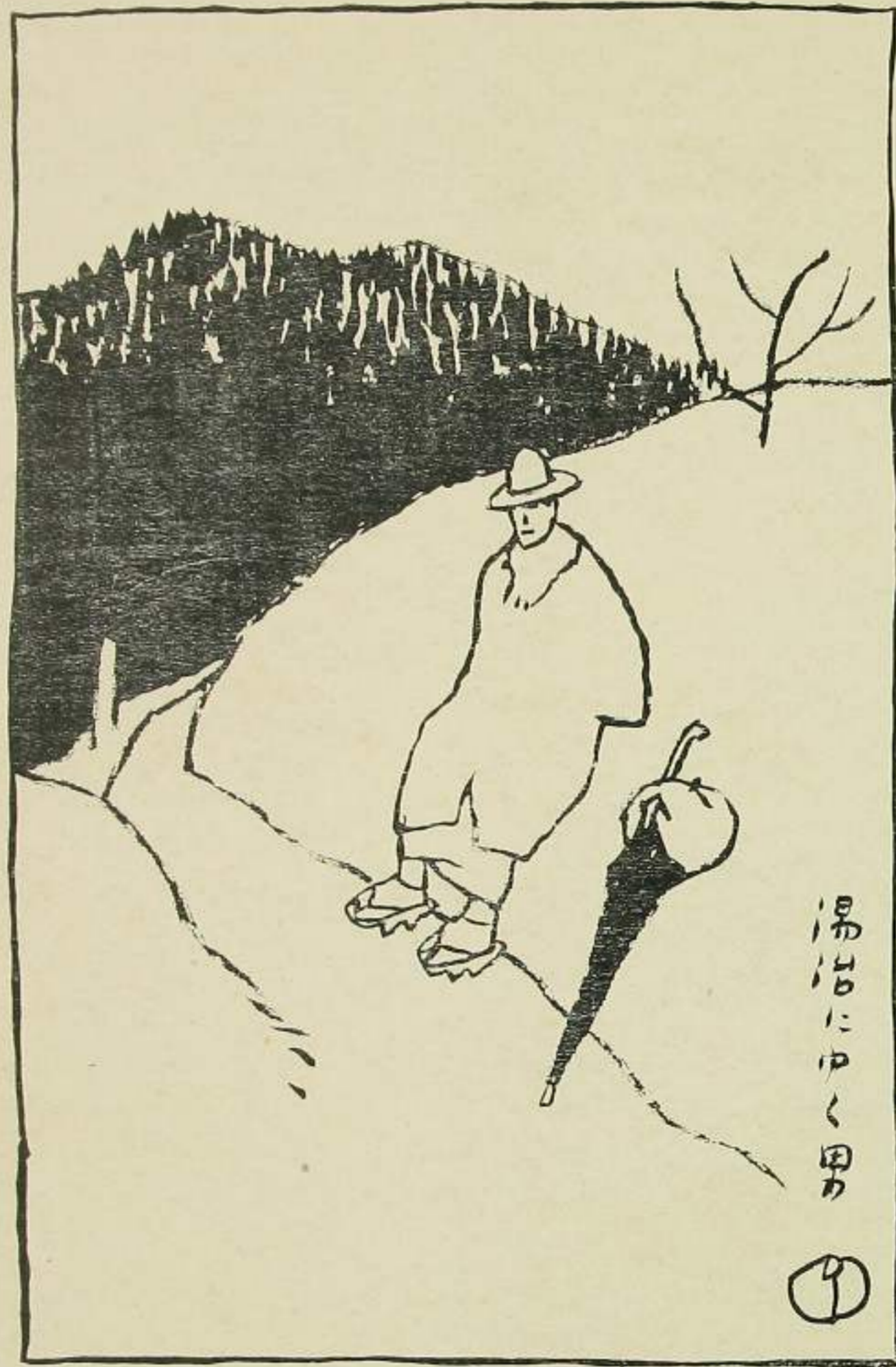


博物館の夕

⑤

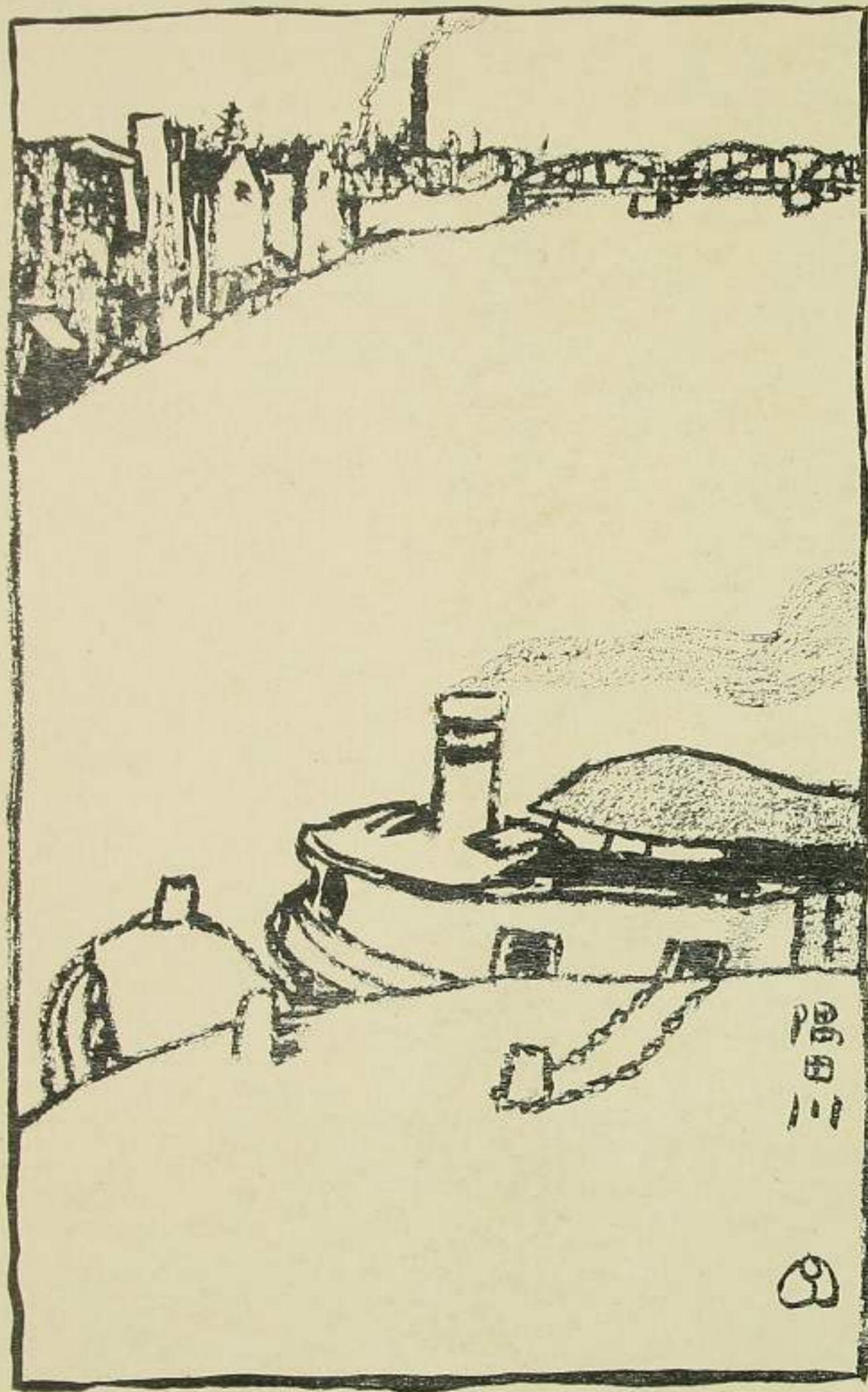


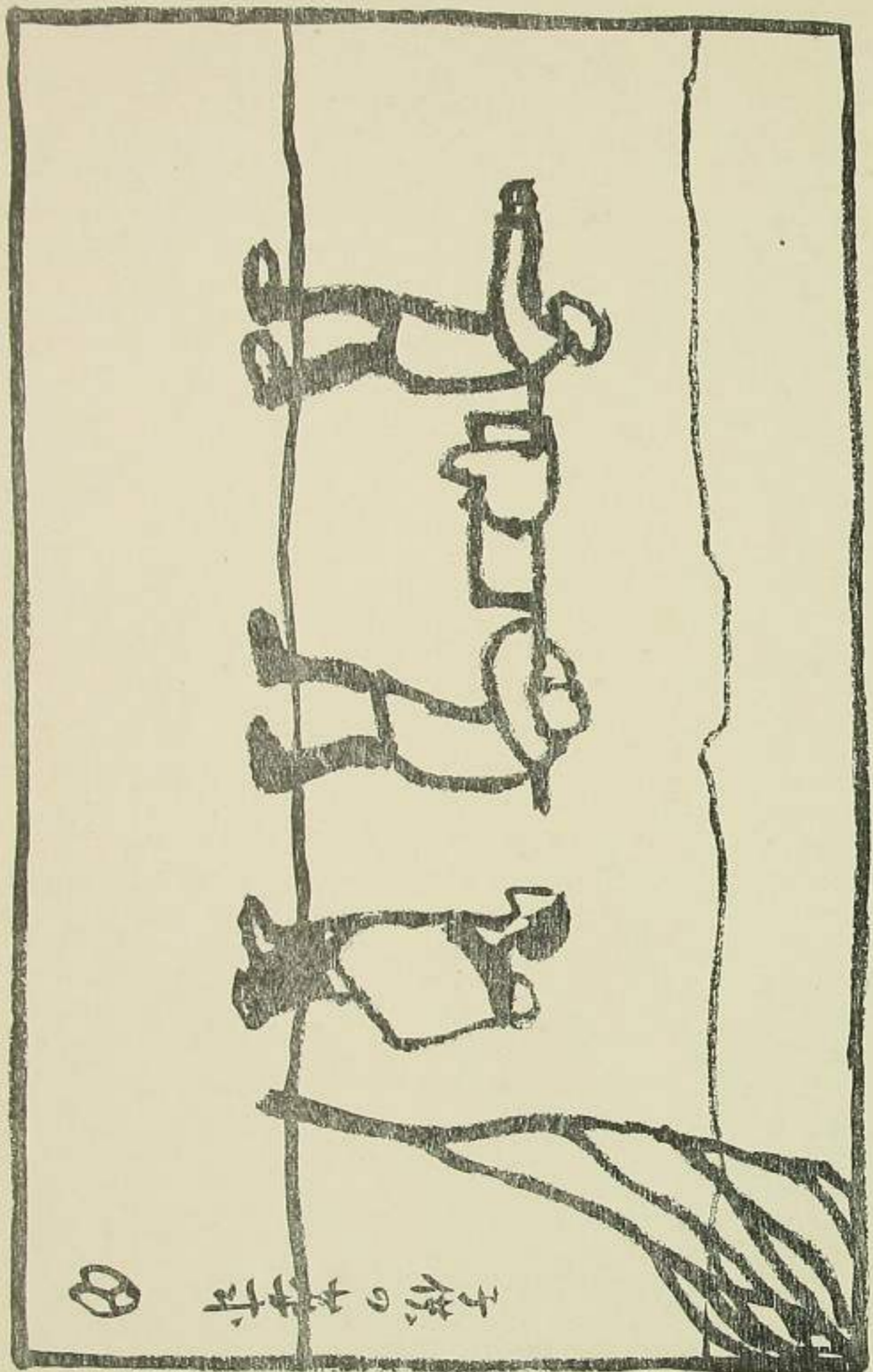


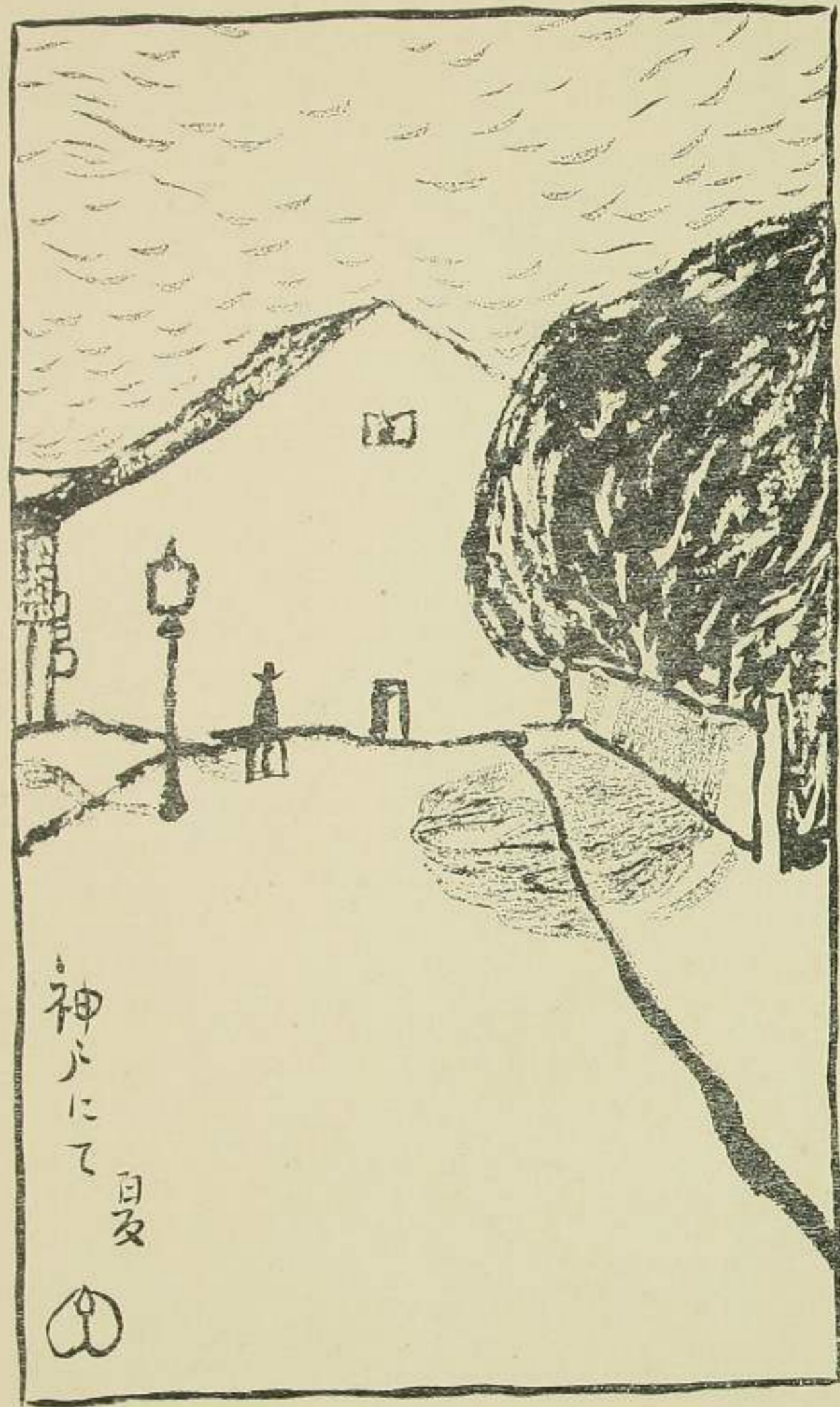


湖にゆく男



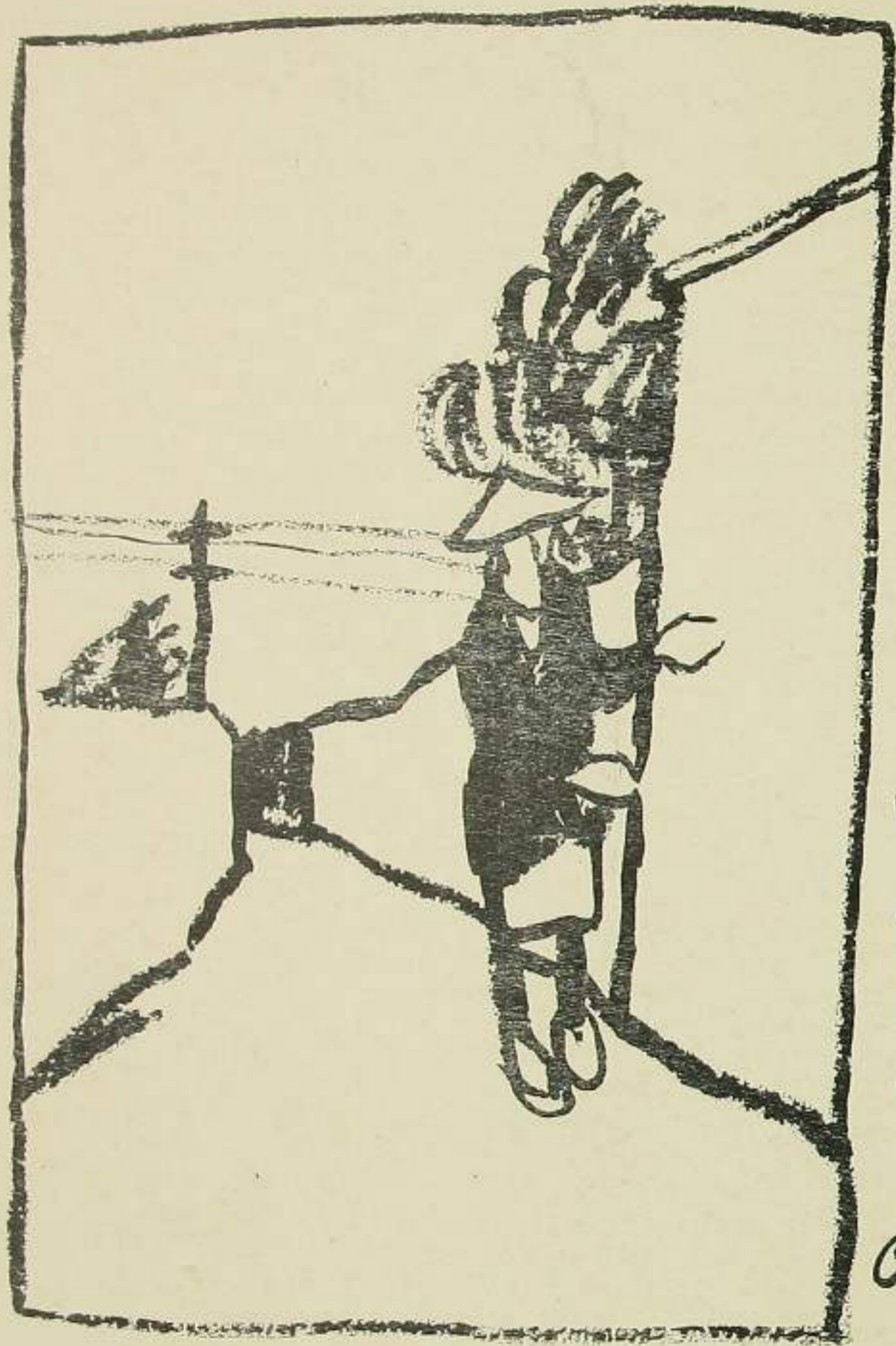






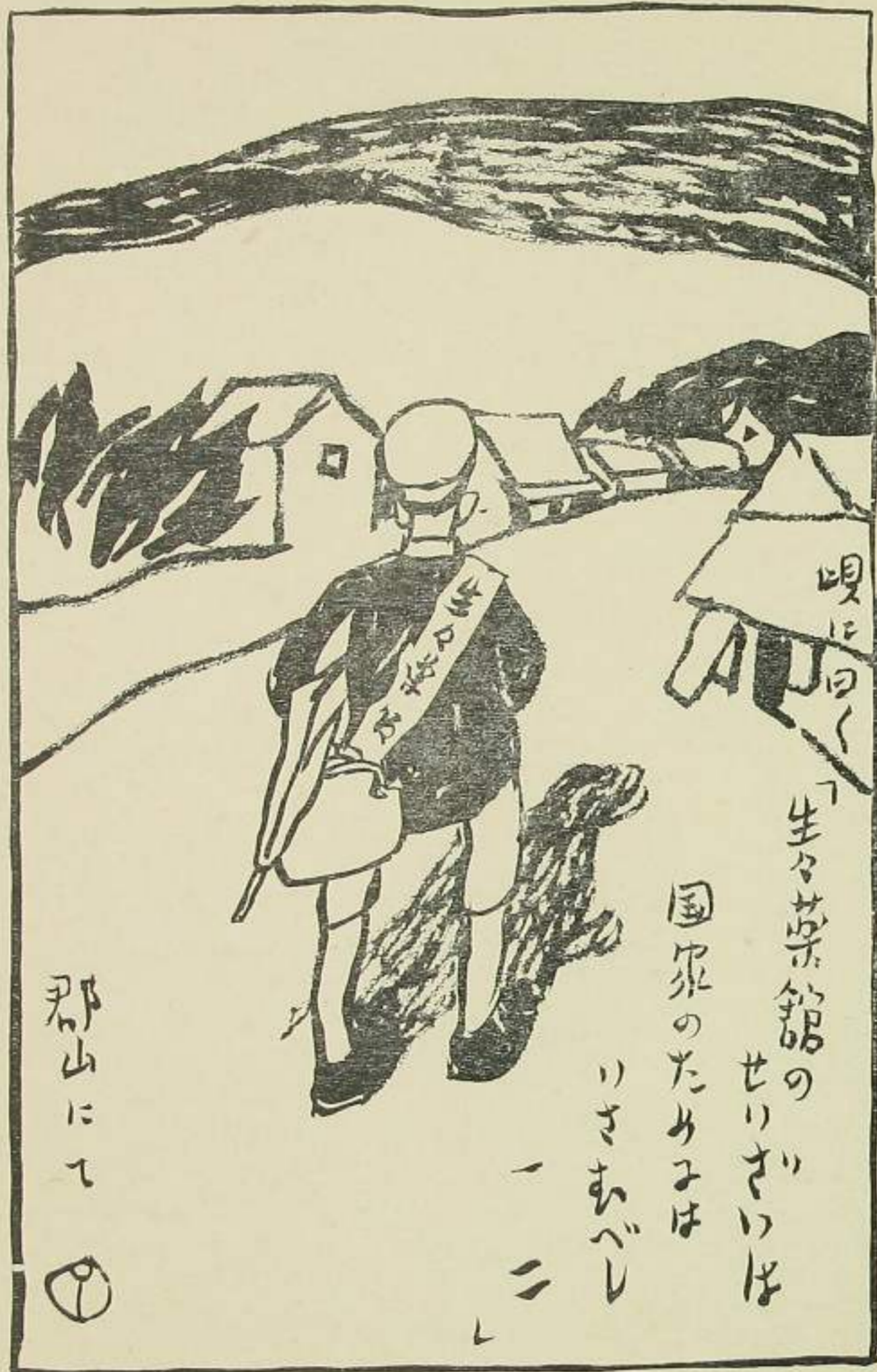
神戶にて  
夏





どつたれりり  
㊦

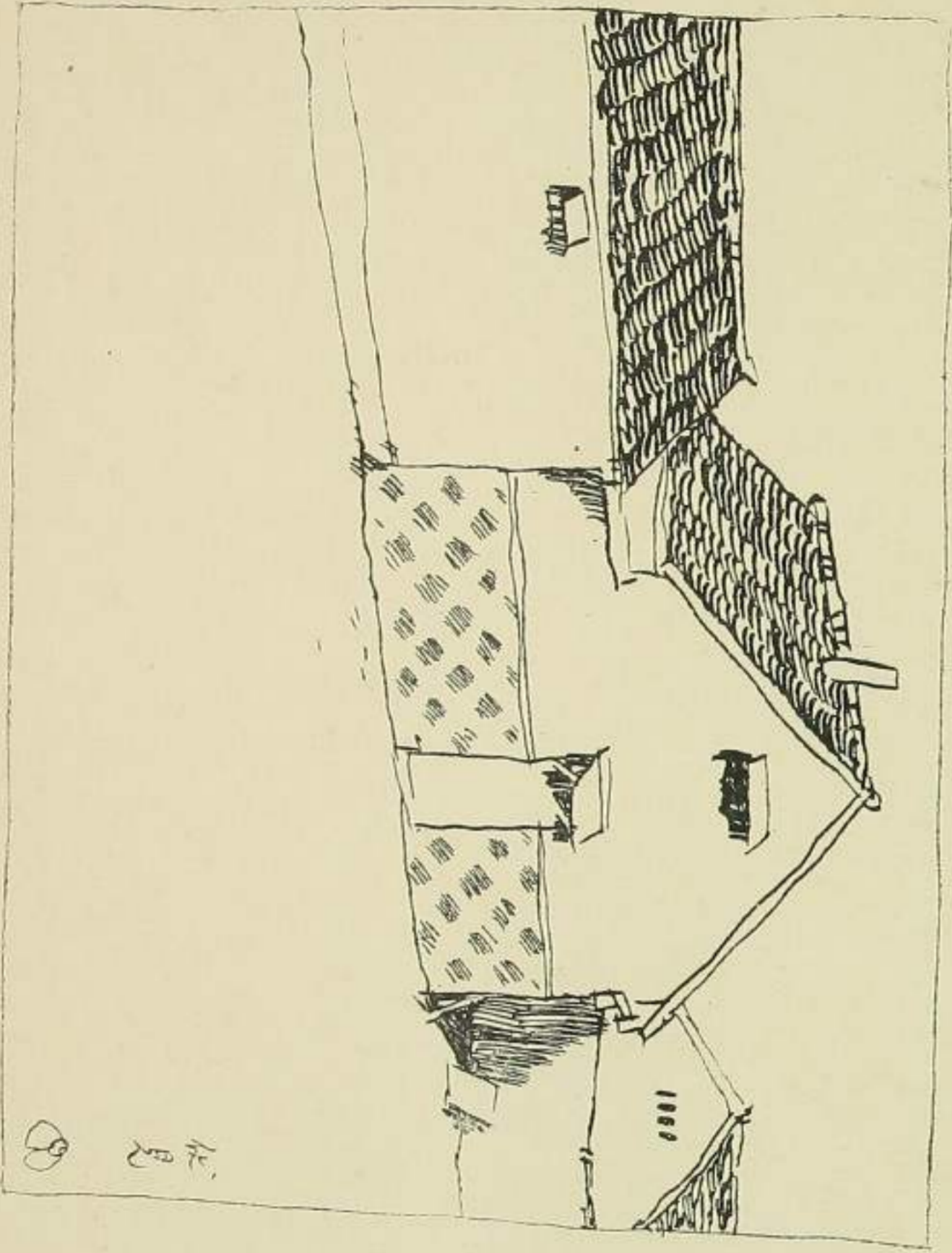




山に







作見

⑧



鬼灯  
三月八日七時二



まじりのあし  
 (2)

朝をたく

さくら美園や

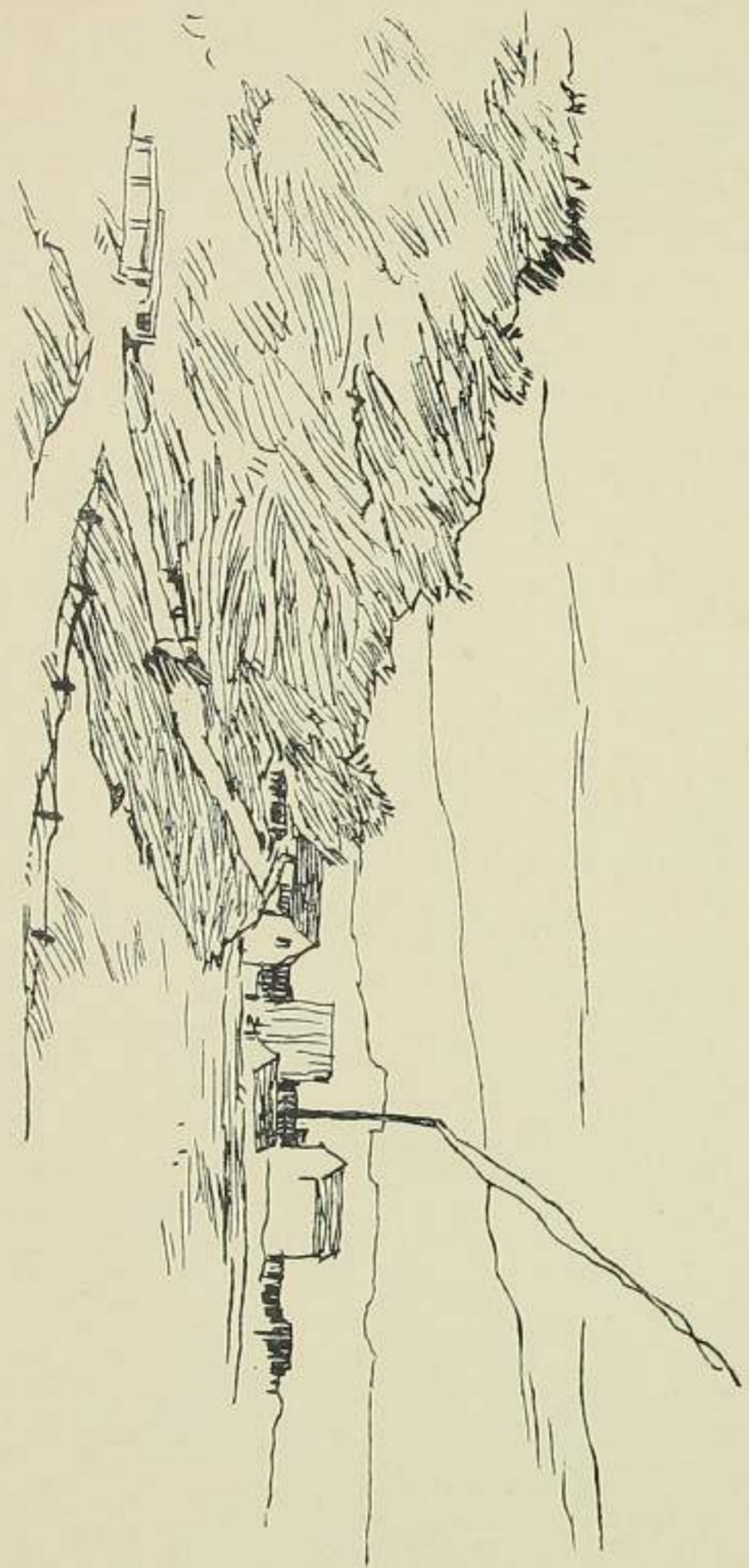
殊月

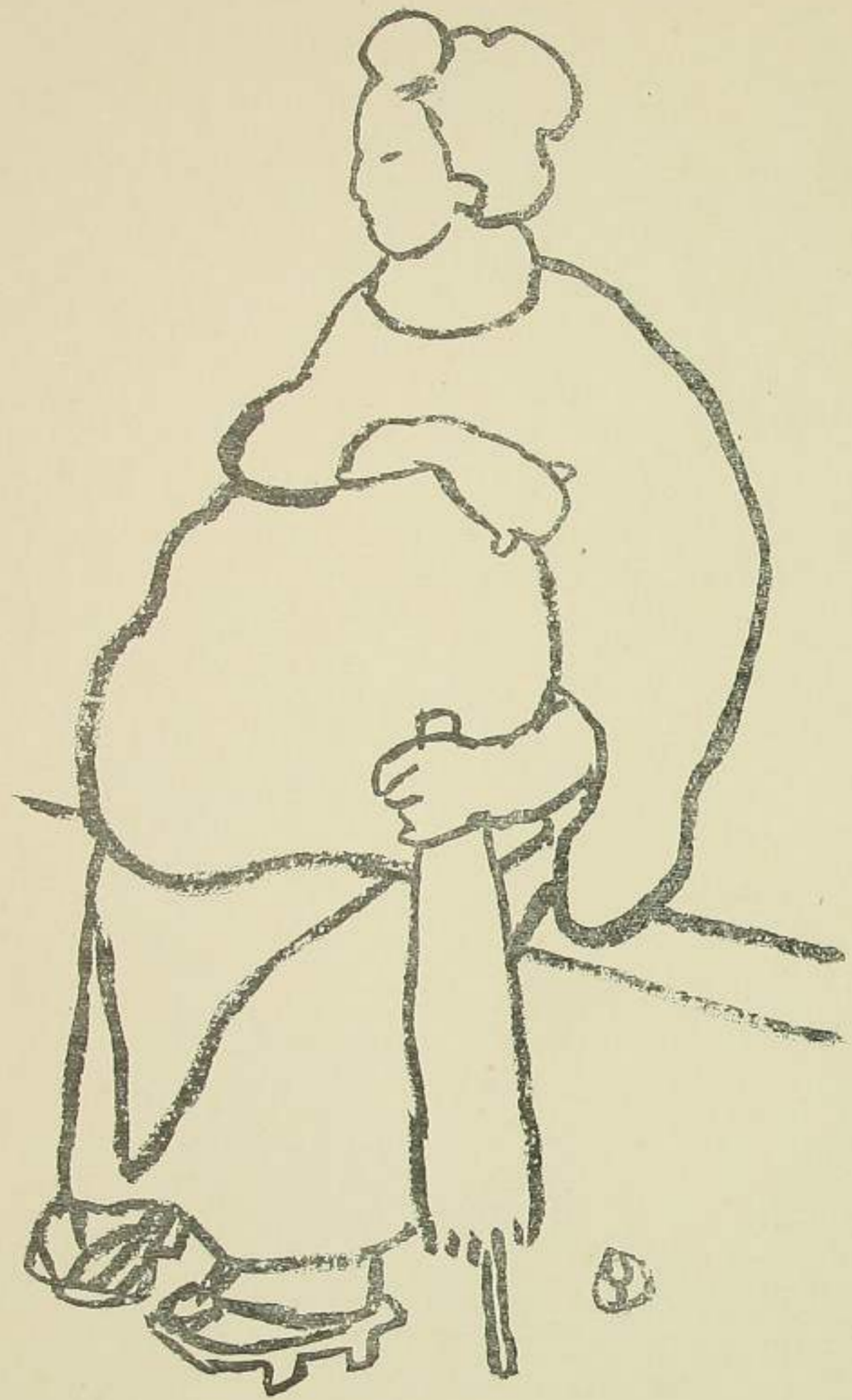
十二月二十日朝

大正

十巻と社にて







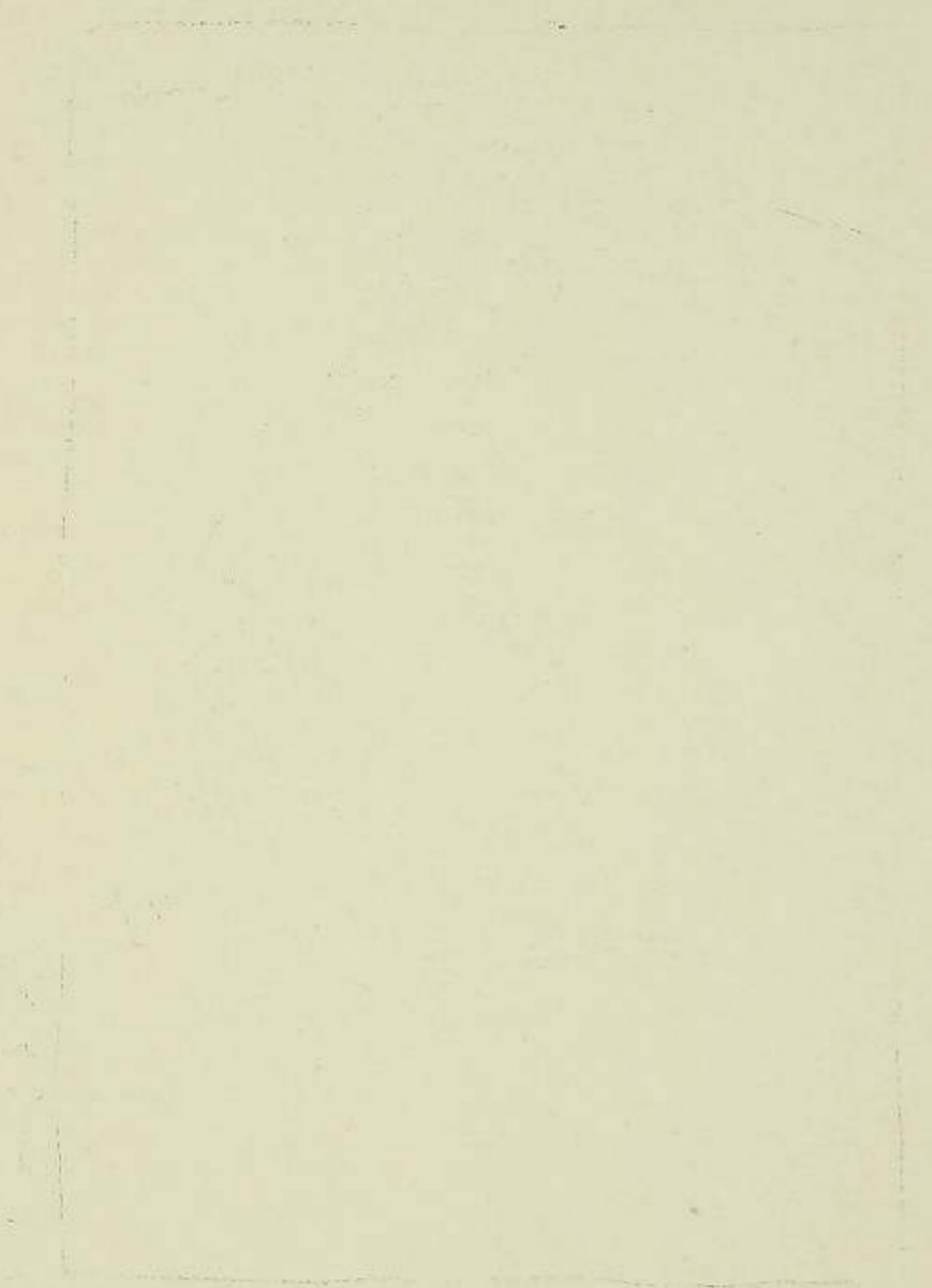
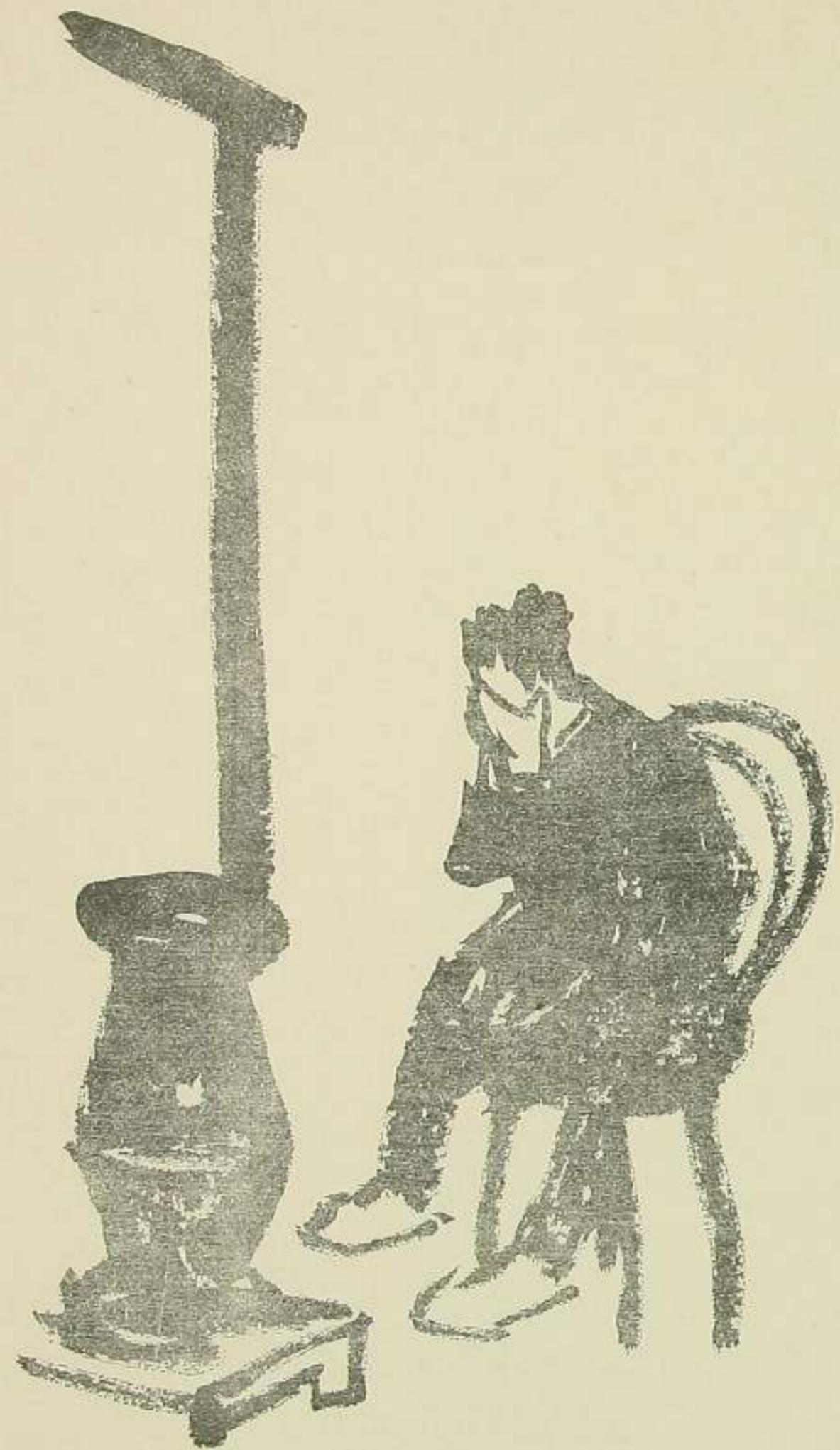


聖地

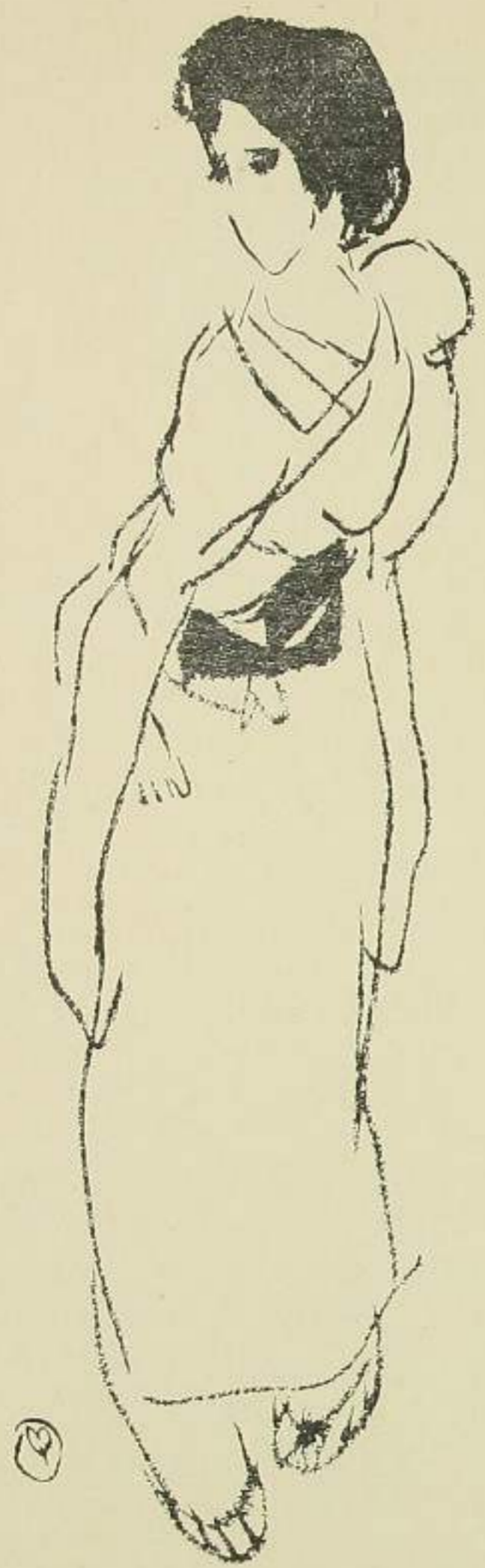


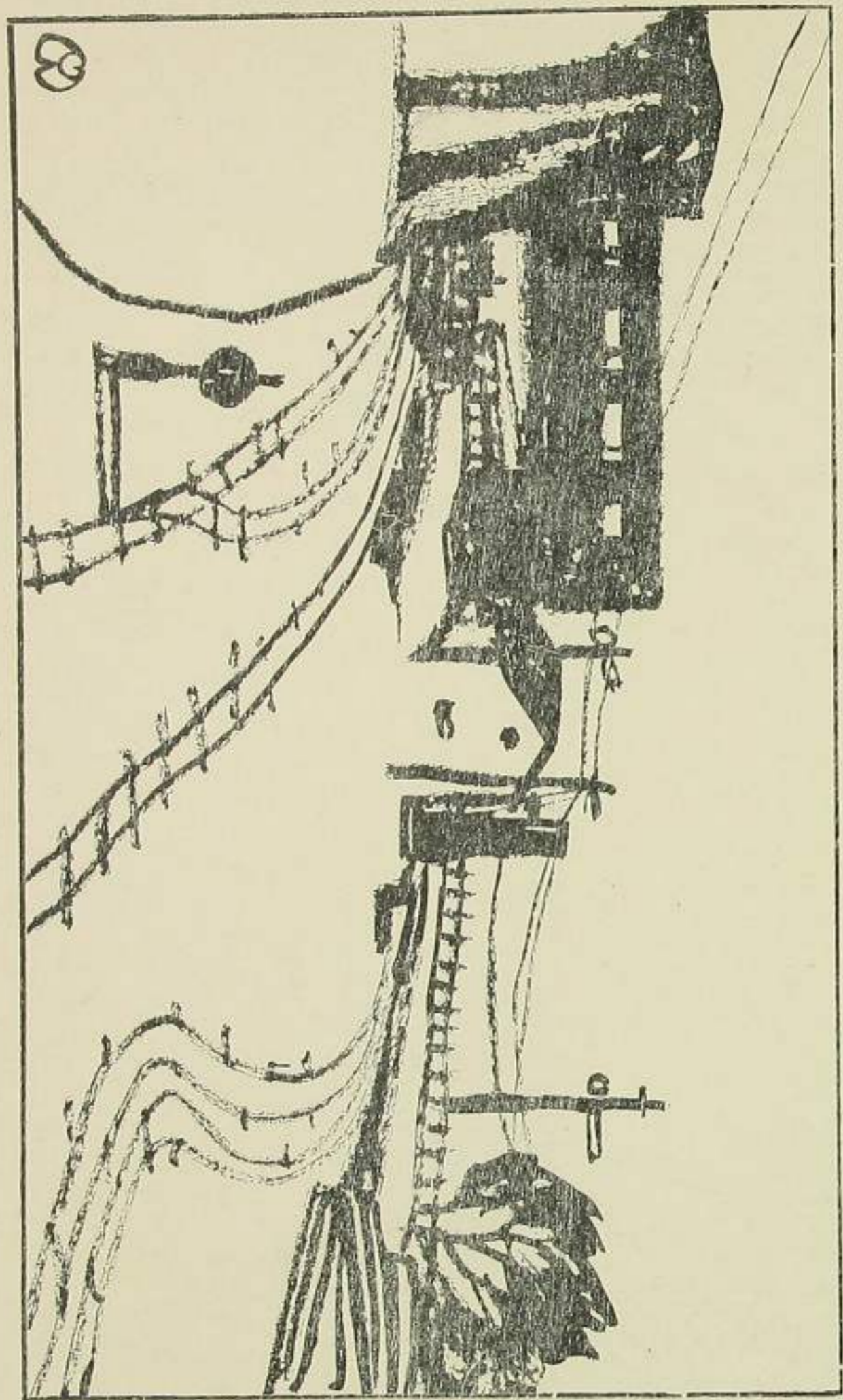


あみものすゝめ  
ササ  
B

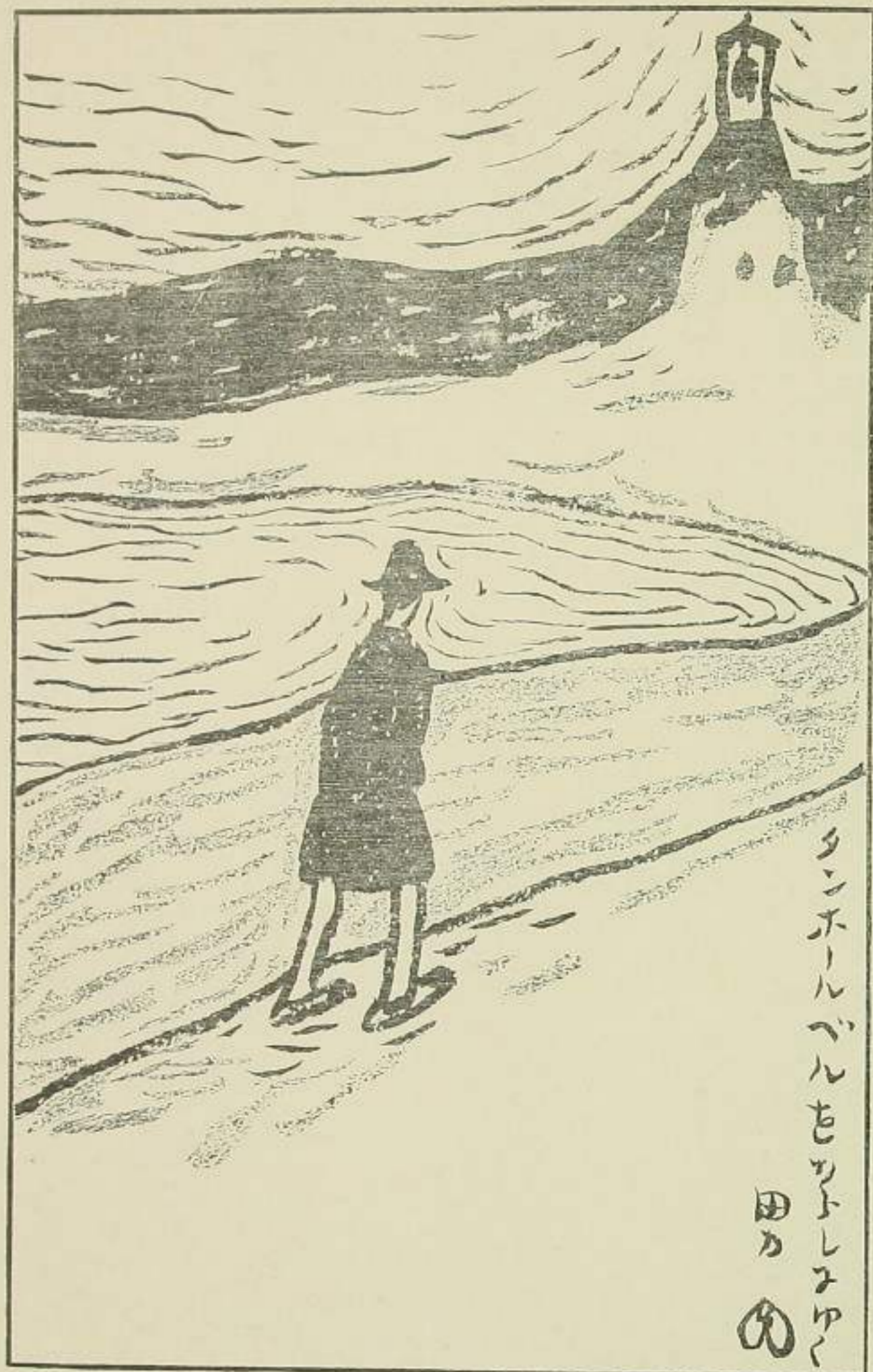












シンボールをリトシヤク  
田カ



そらとせしまこにりつしかはるまいよ  
そなたの世がなれのこころが

本月ついにち  
りあつに  
あ

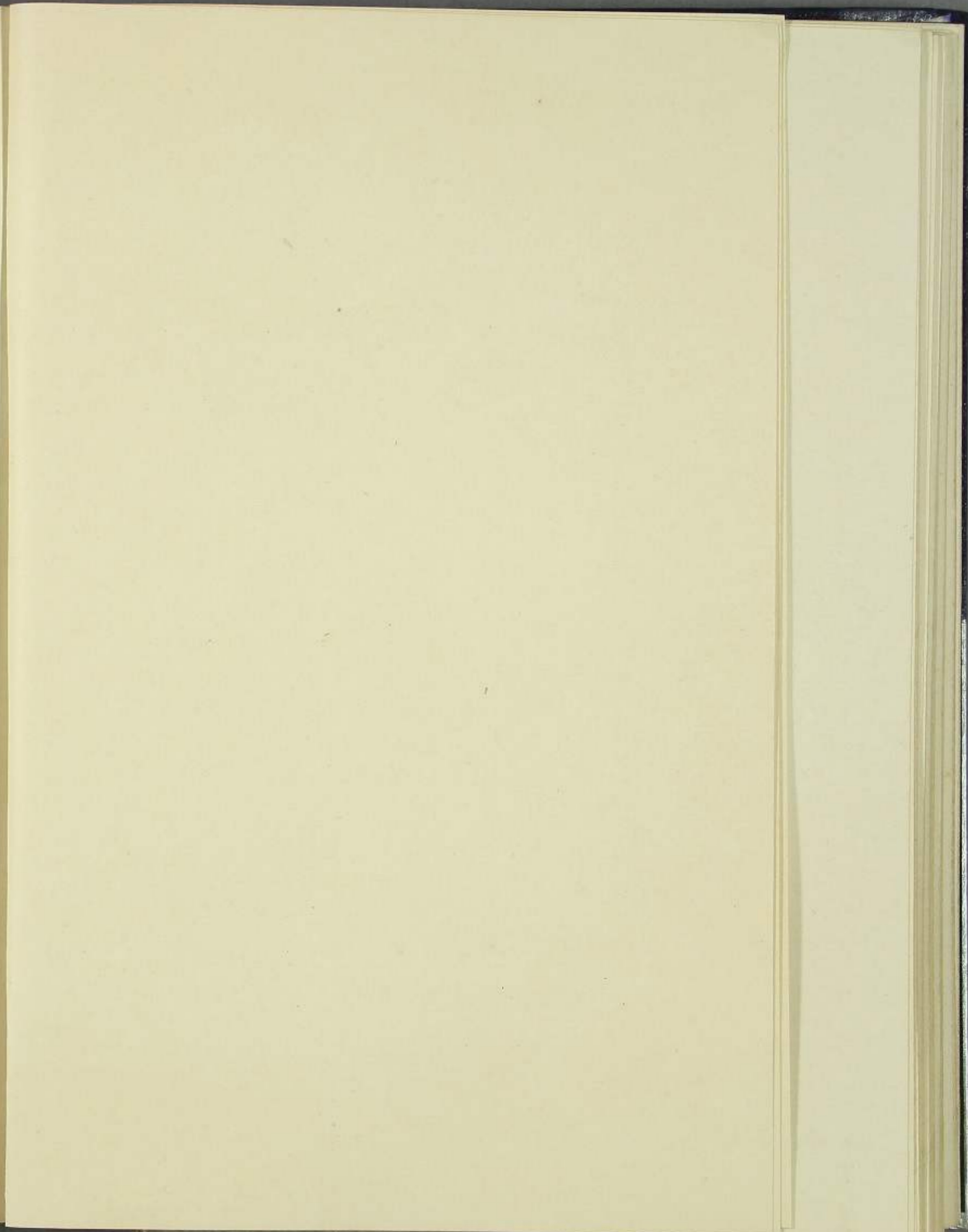
毒草の下宿

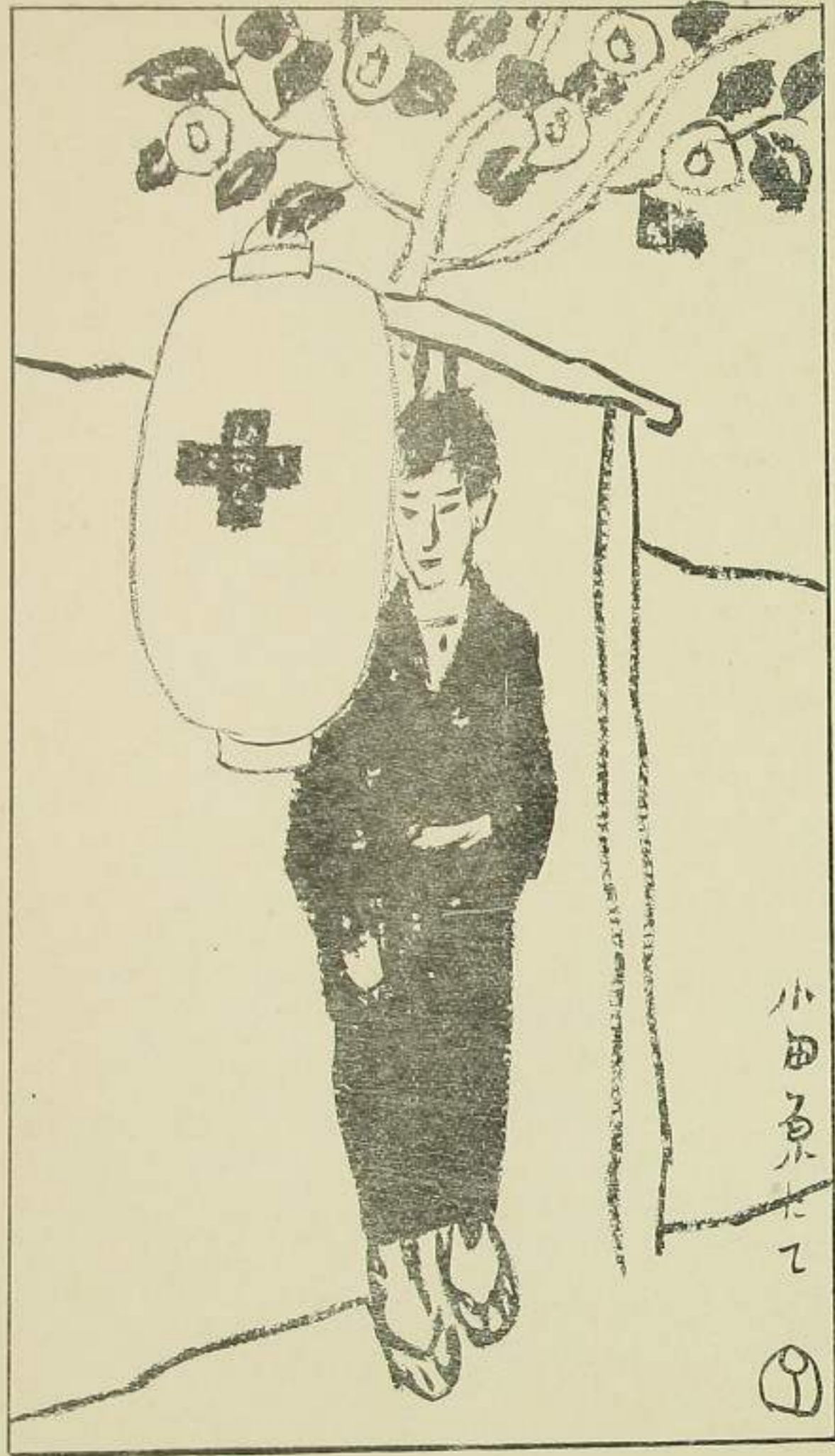




文政十一年

寺中物





小田原 乙

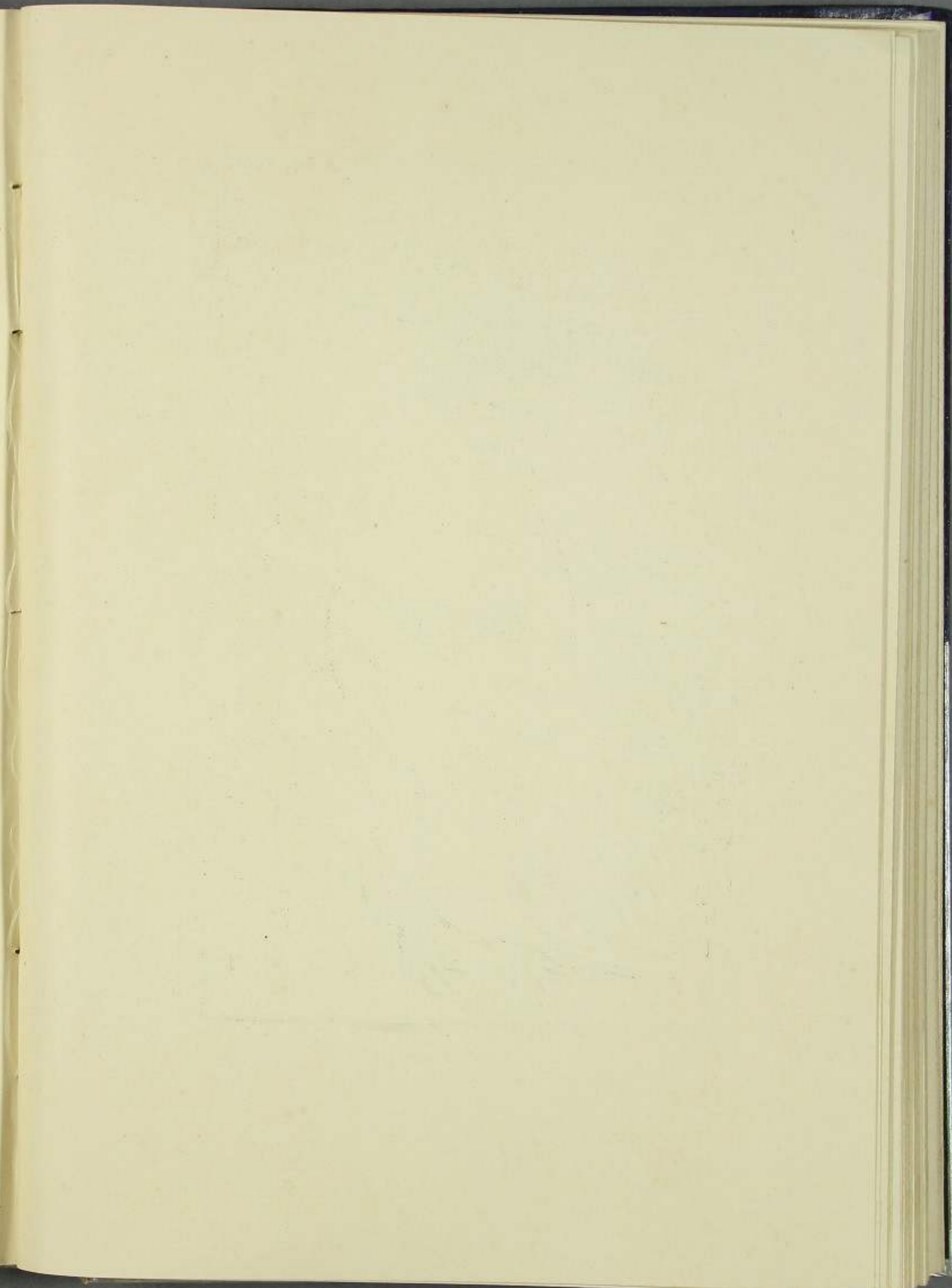
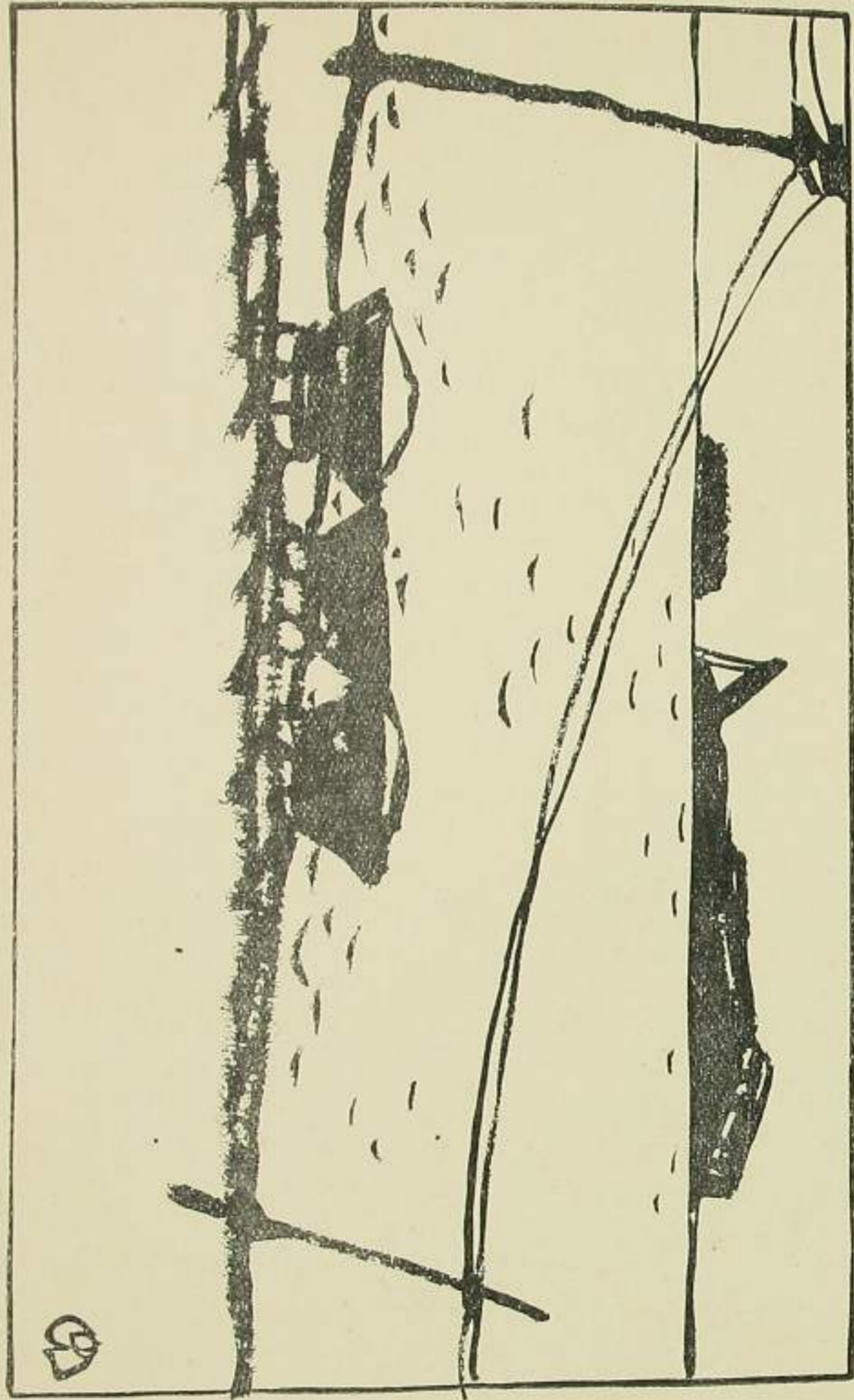




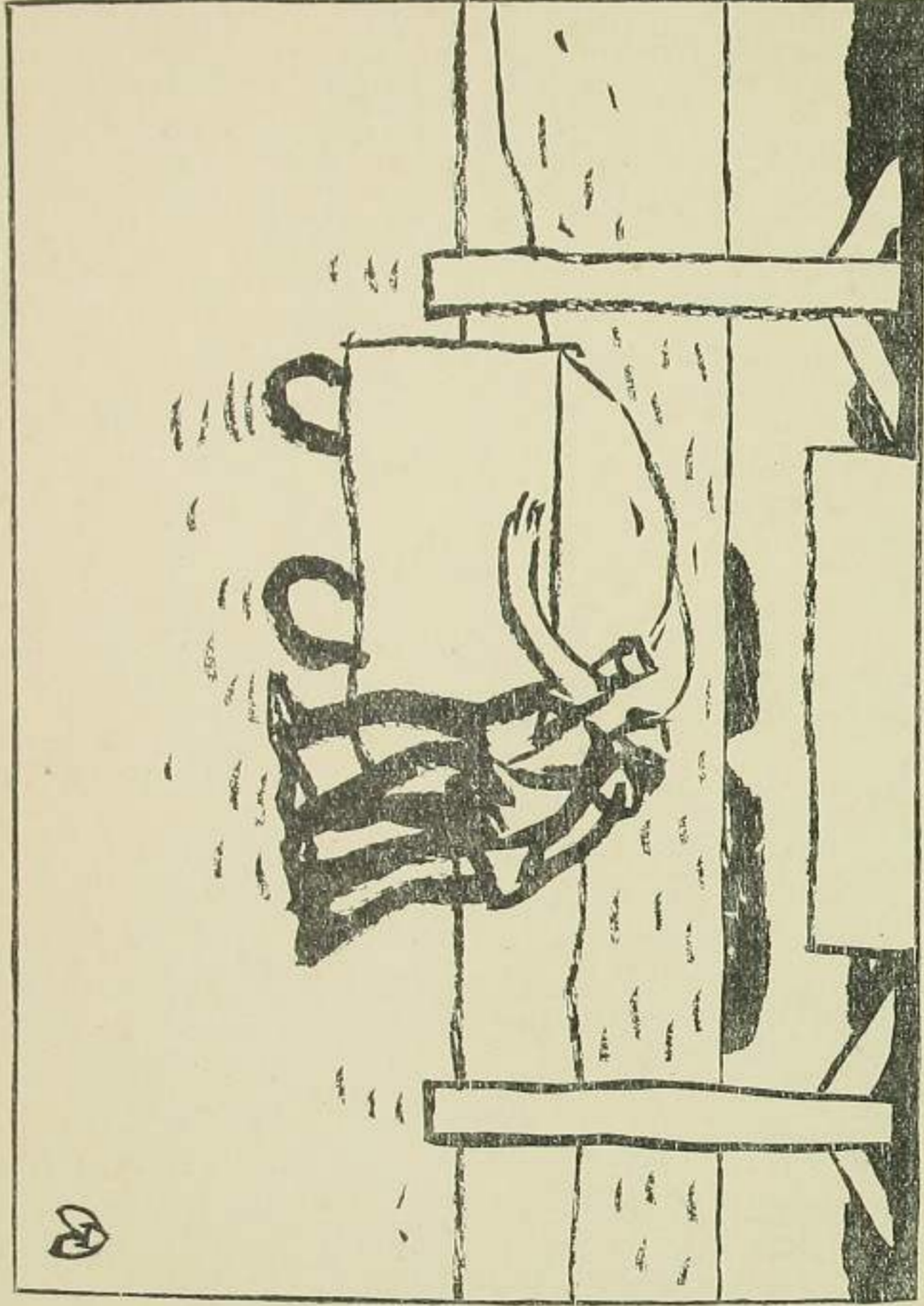


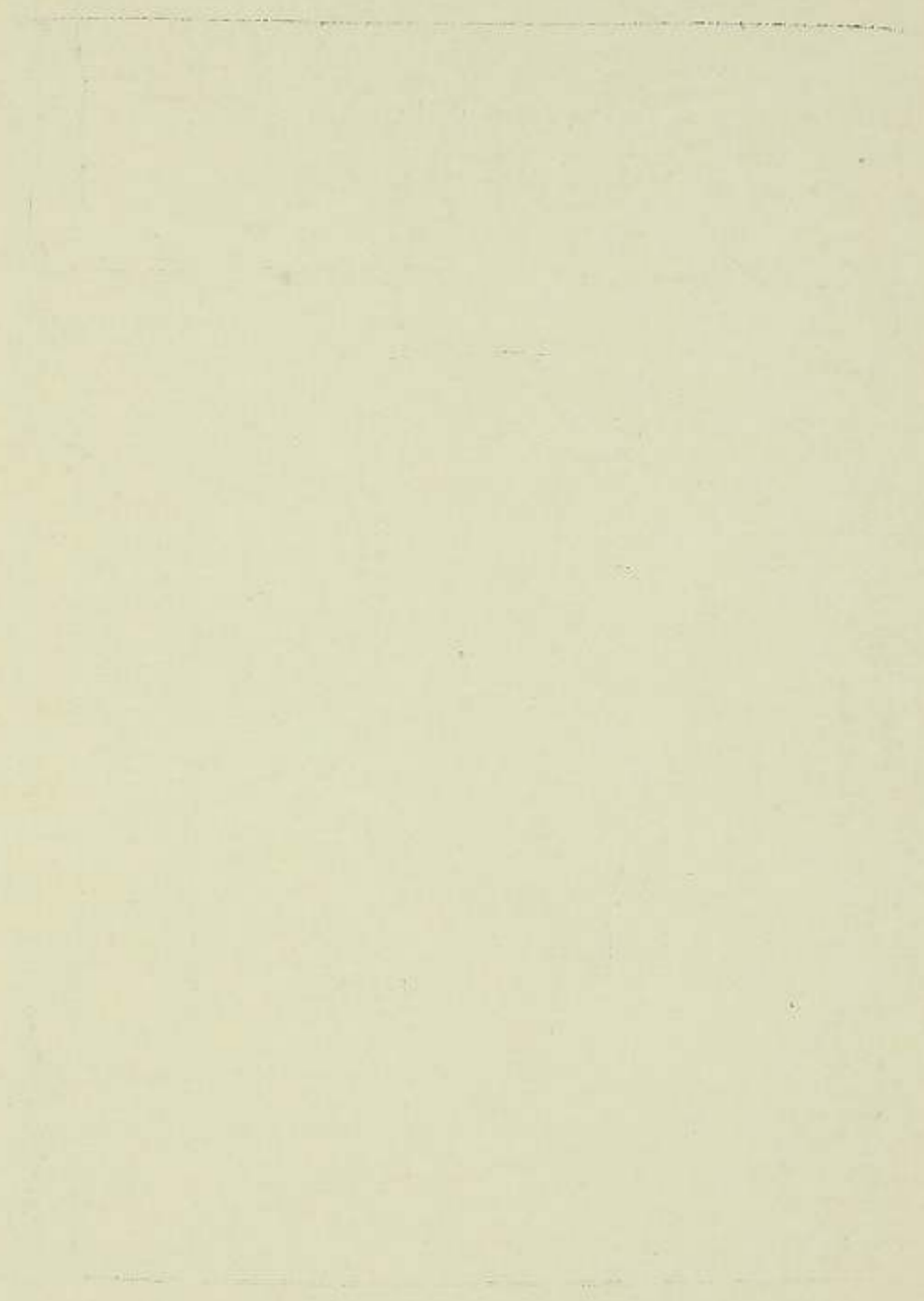
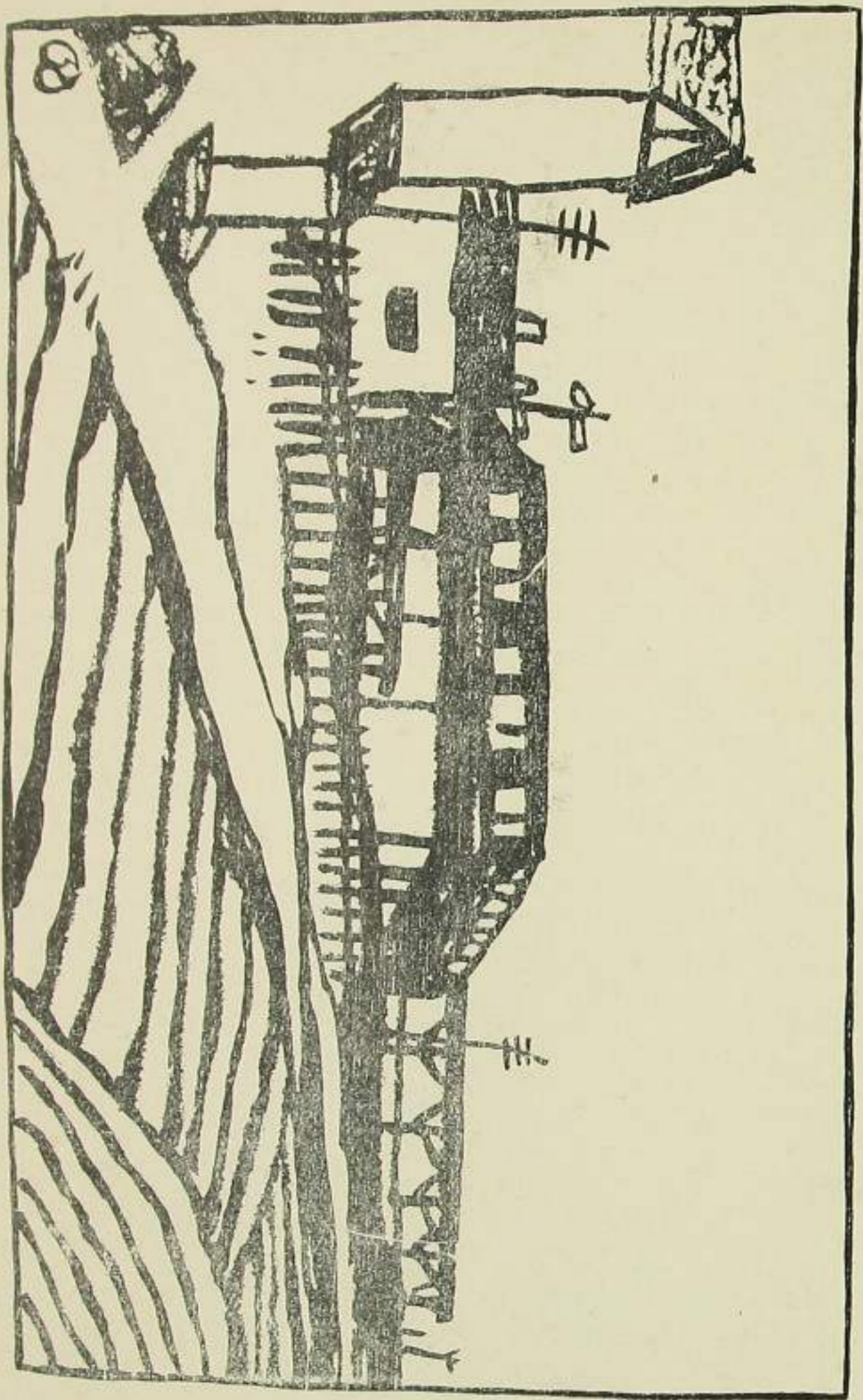
ラブレターと受取った女

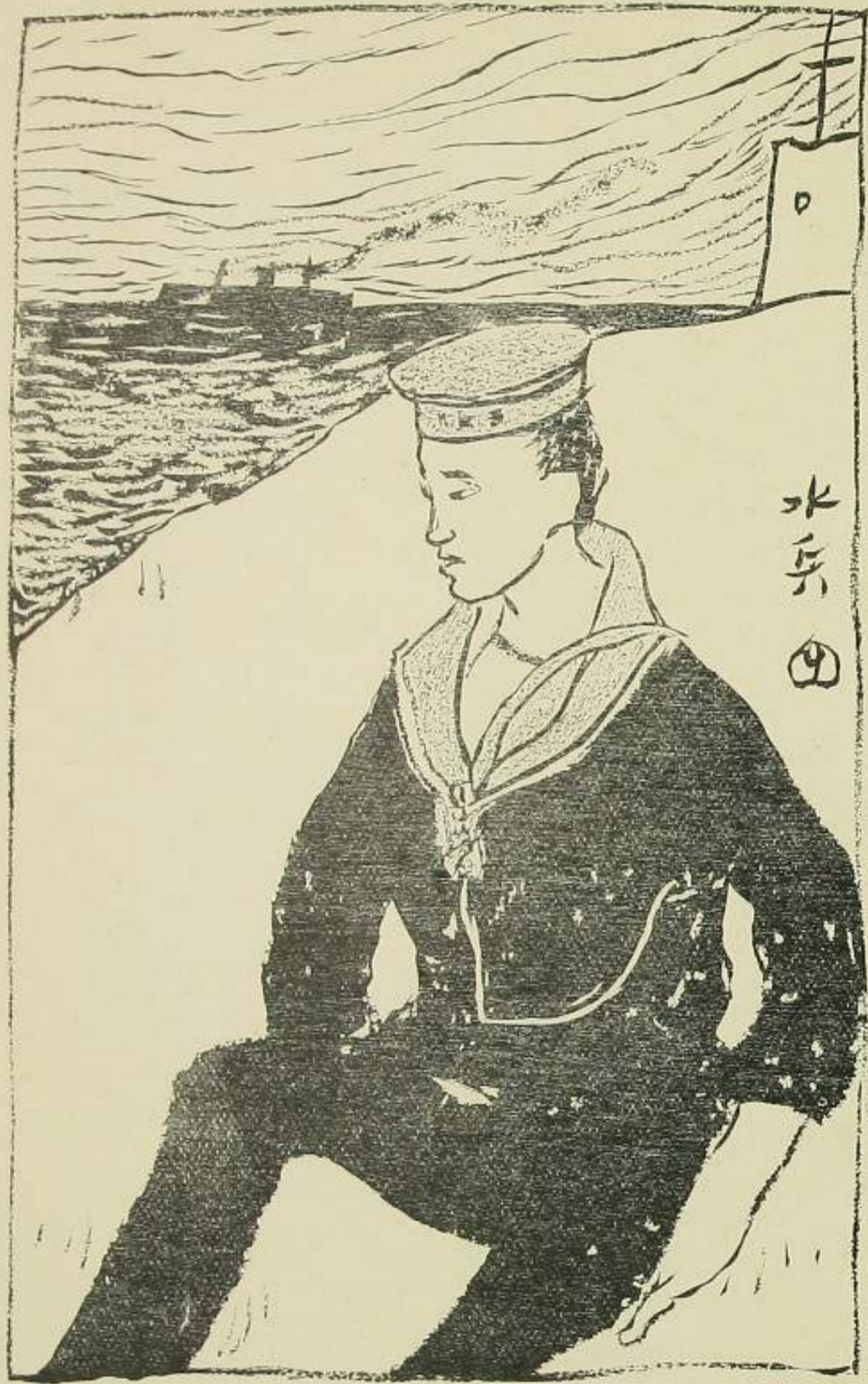






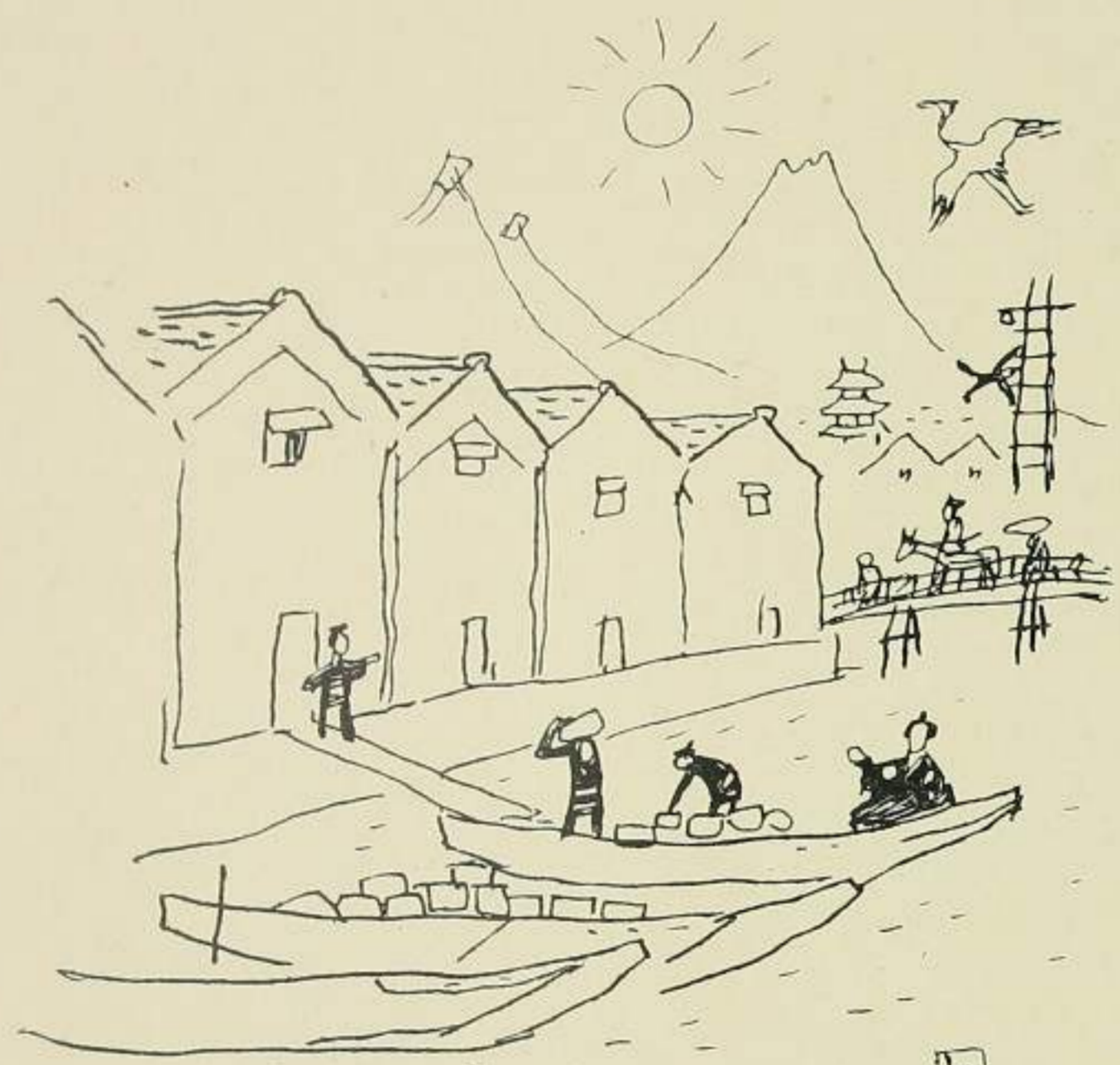






水兵 田





江戸先所日本河山

みかんの  
初廿何



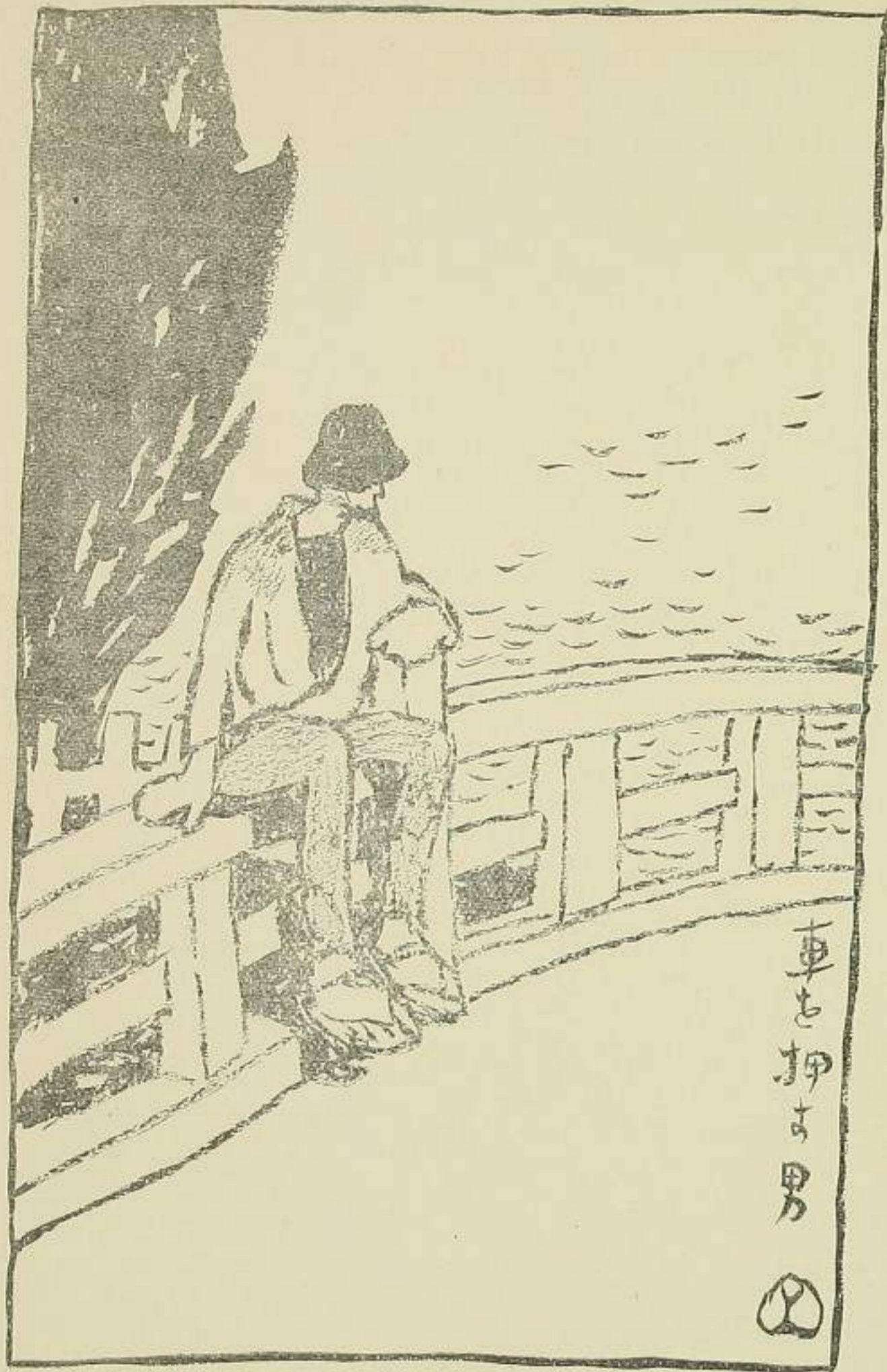






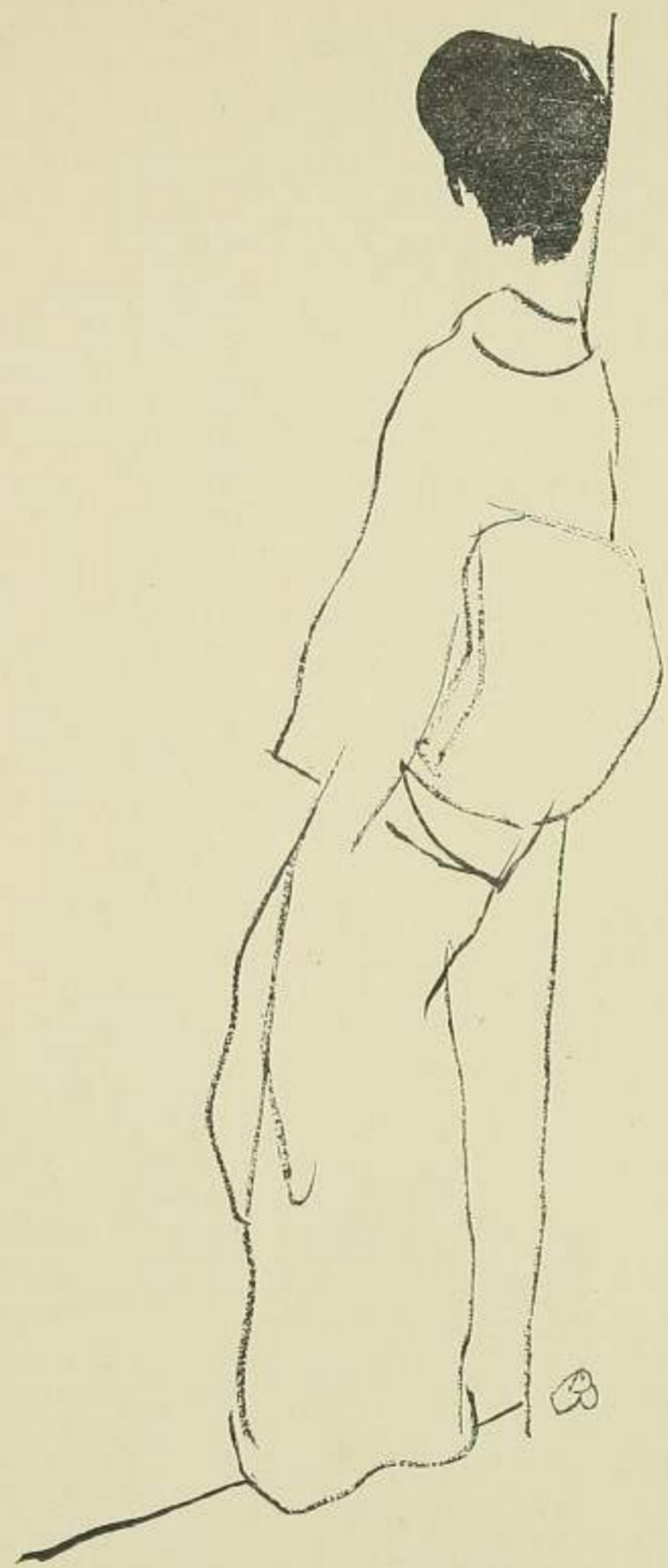


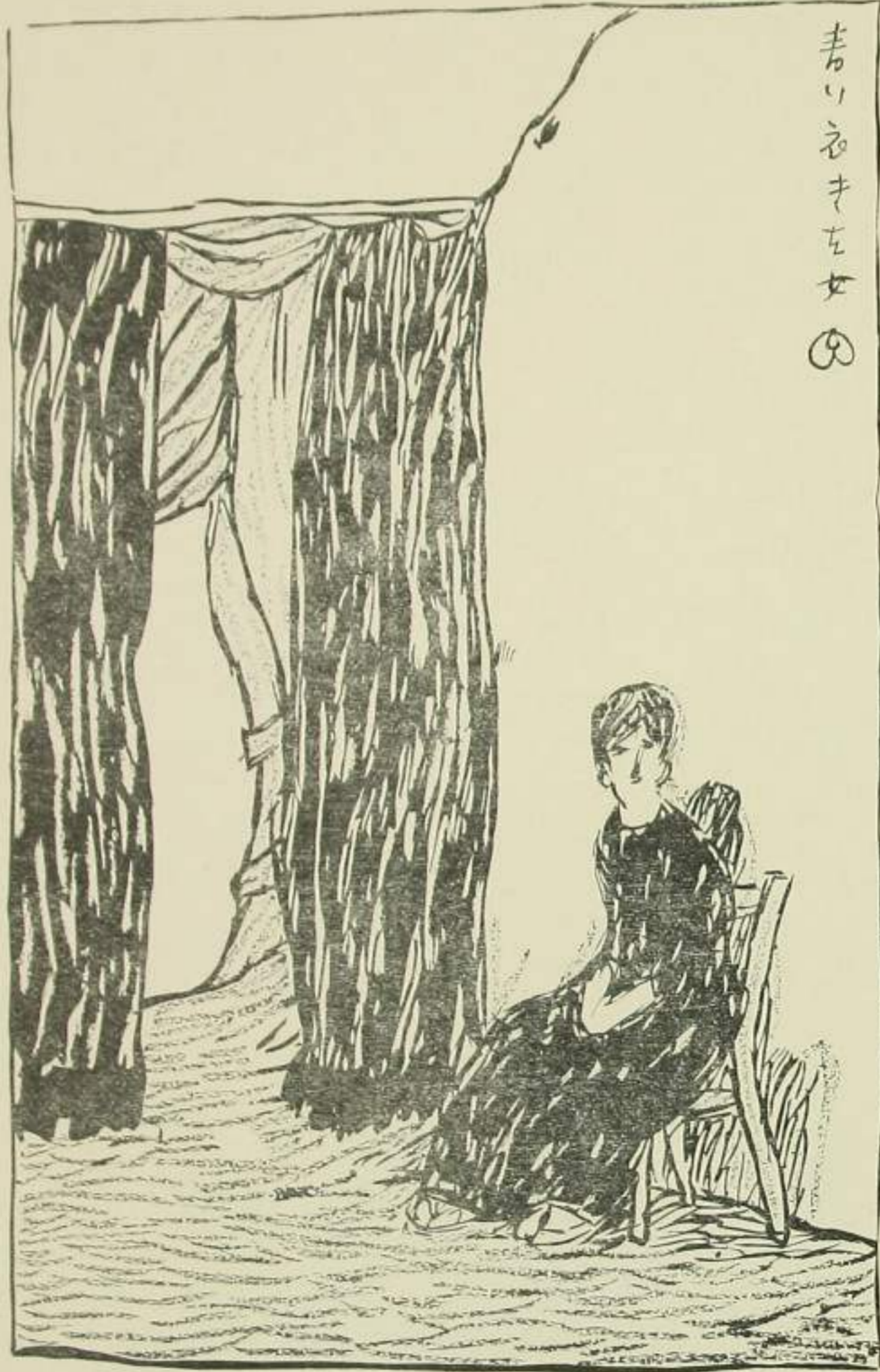
9



車と押す男  
④







青  
り  
衣  
ま  
を  
女  
の

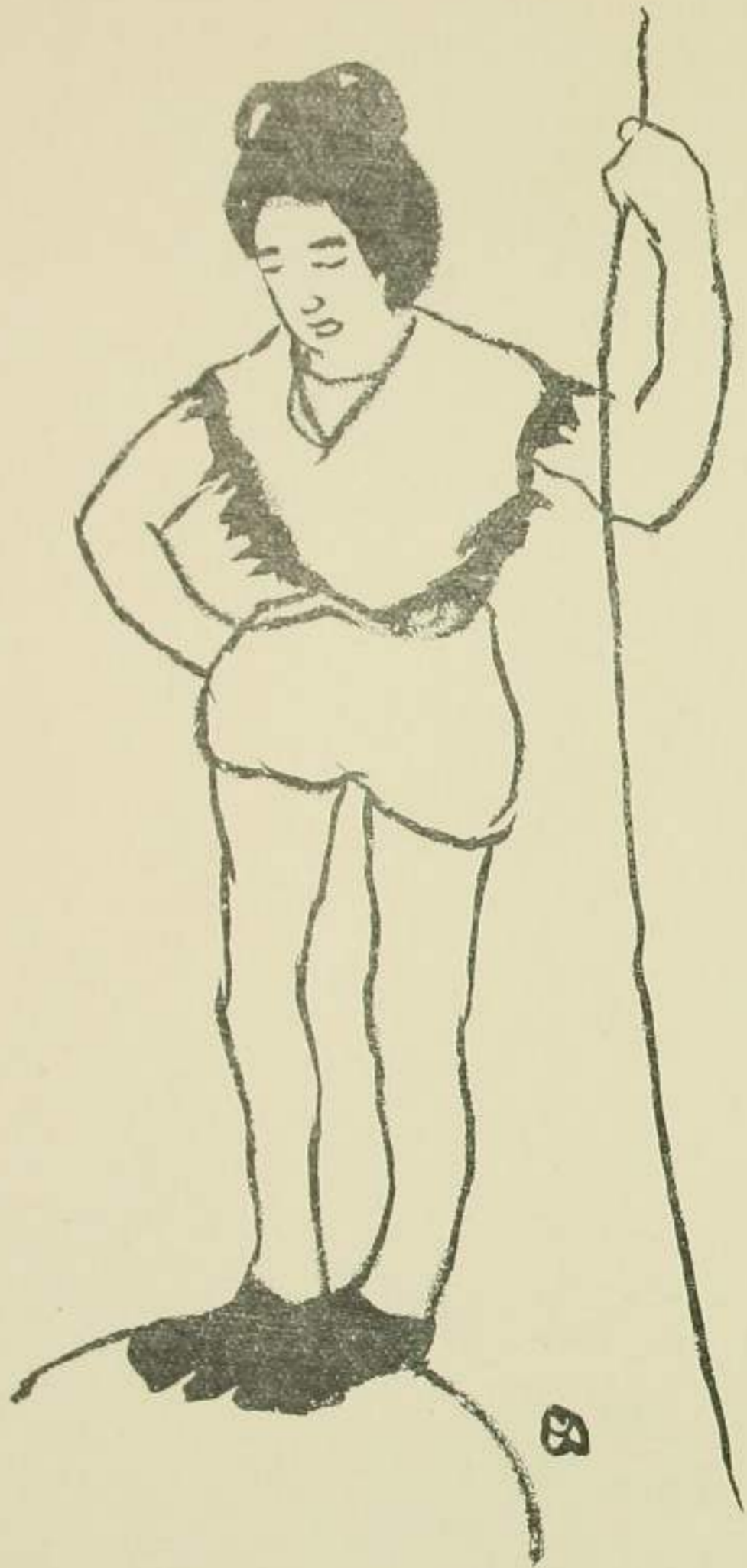


源之助の  
腹のお由

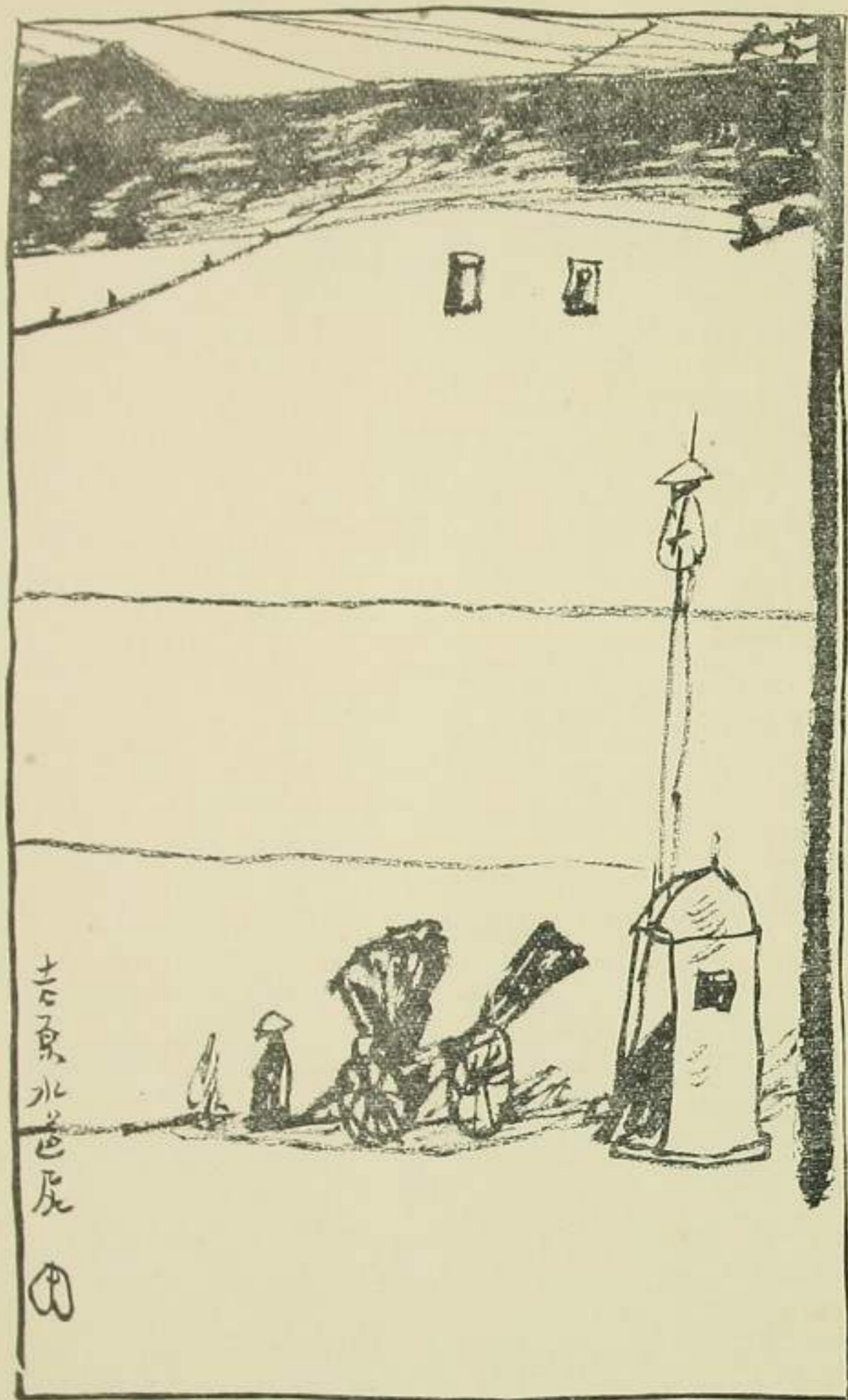


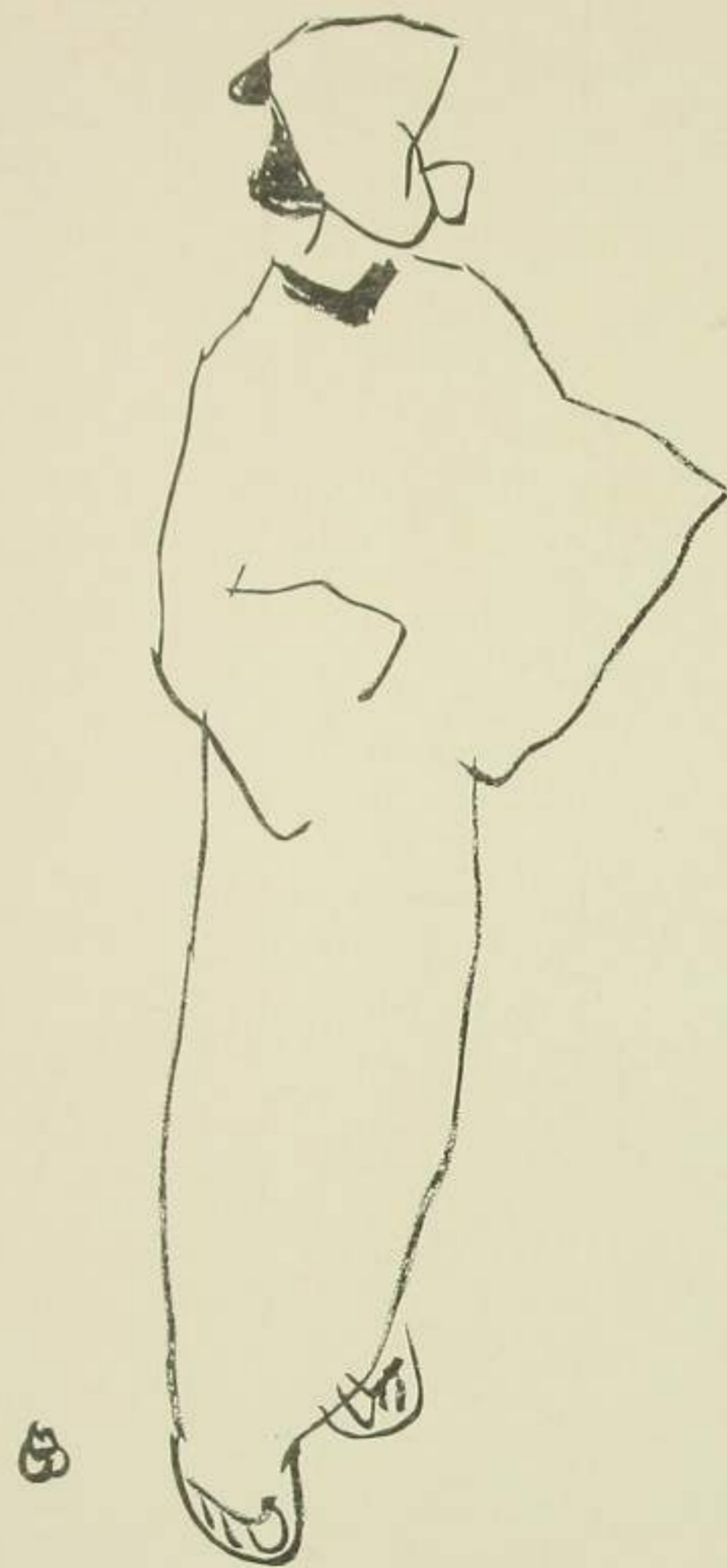












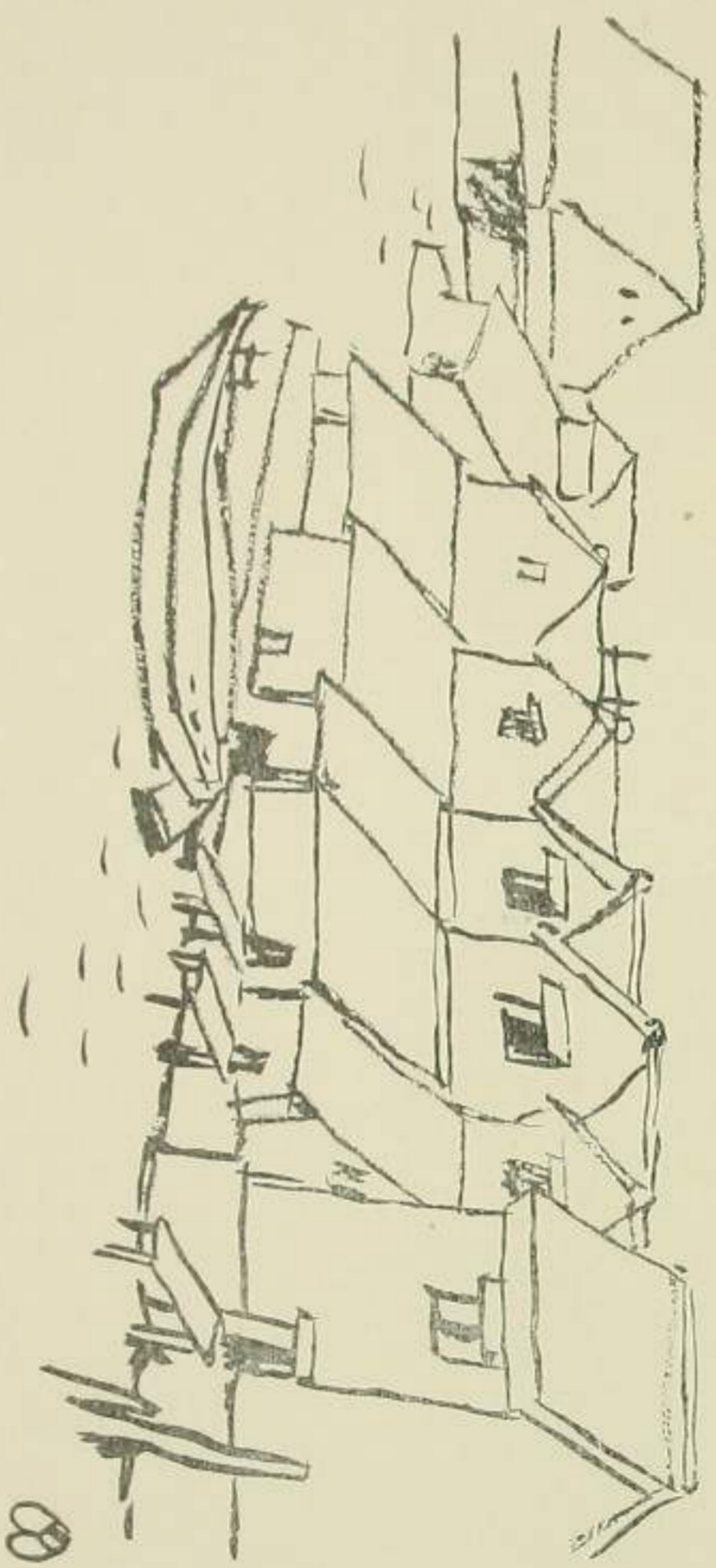






11 4 11 11 11 11





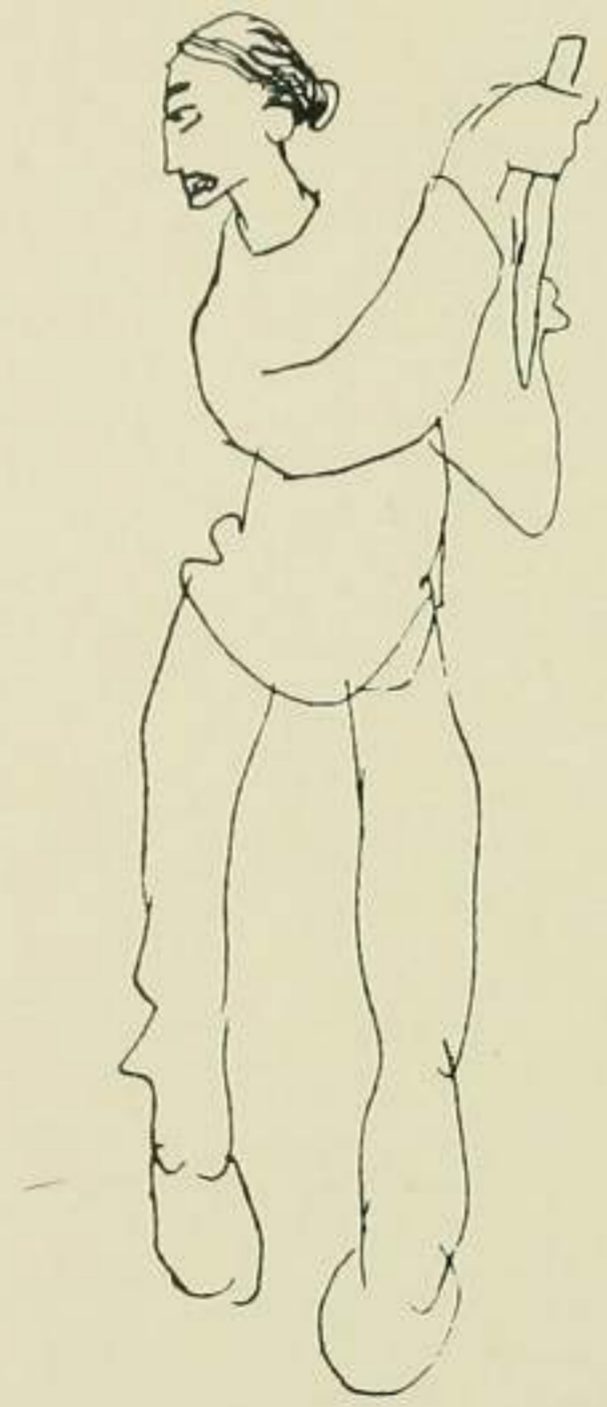
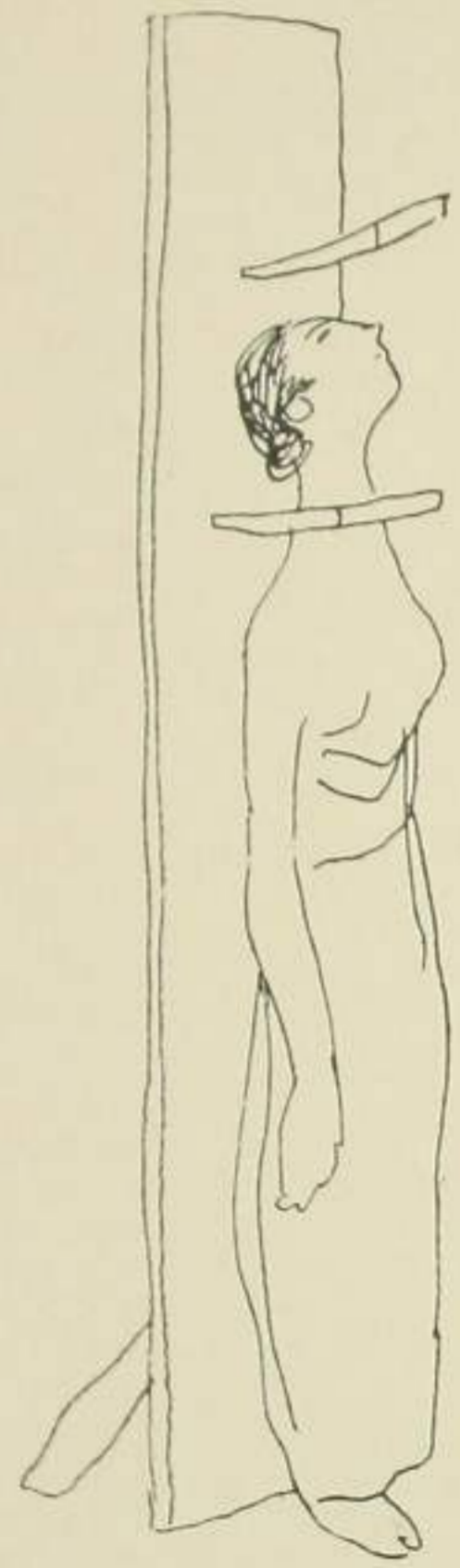
望  
望  
望

88



3









もうひとつはあかあか  
えいせいさきあき  
あきあきあきあき

頃

あきあきあきあき

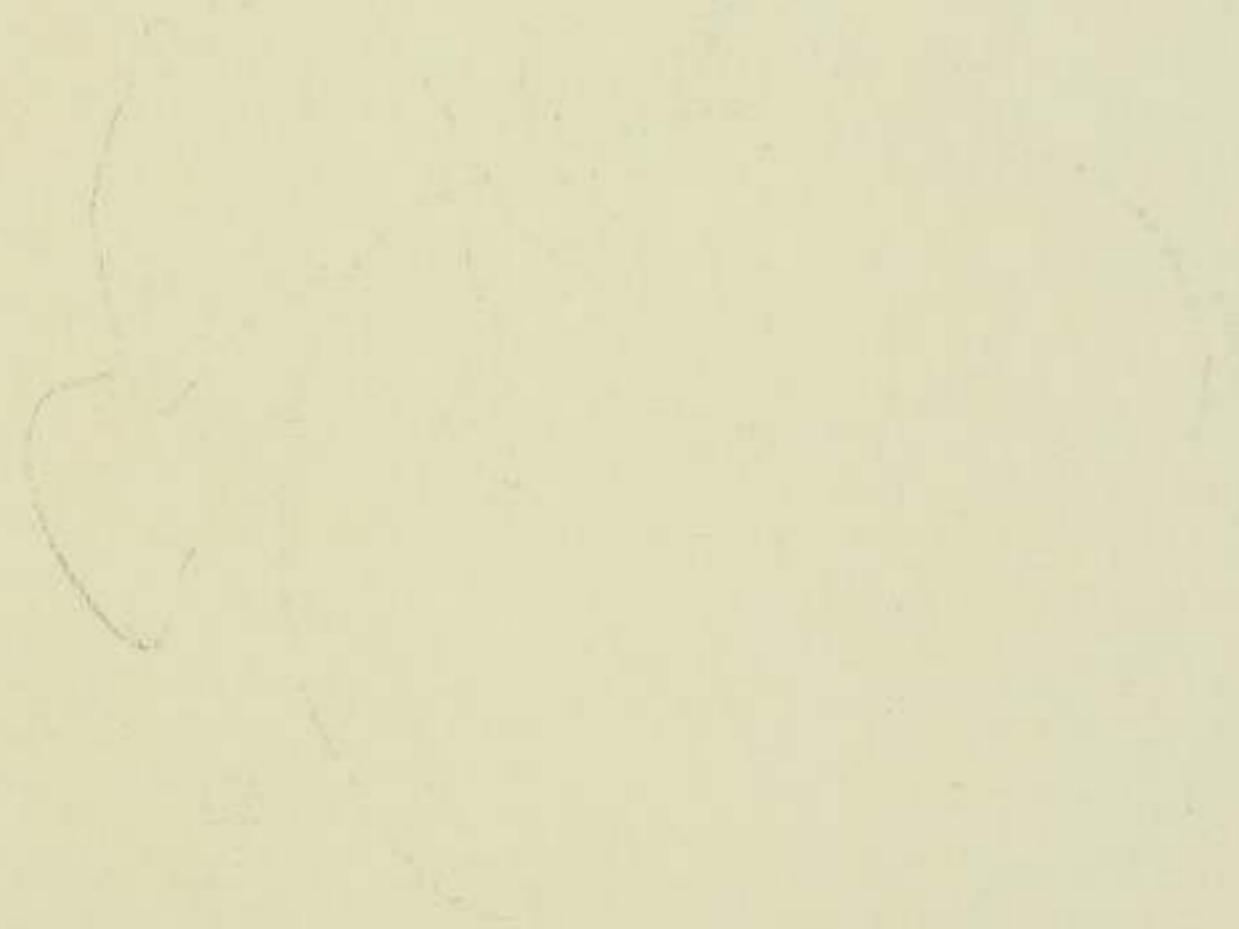
あきあき

あきあき

あきあき

あきあき

あきあき



MIYASAN MIYASAN

O-MMA NO MAE NI

CHIRA CHIRA  
SURUNOWA

NANZYAINA

EMO CHYOSEN SEIBATSU

NISHIKI NO MIHATA

WO SHIRANA IKA



集 詩

花く咲夜

作二夢久竹



濱の旅館

なつかしや芋の畑の路とほく郵便脚夫きたるあ  
さあけ

心中の噂もいつかたえにけり濱の旅館の夏もふ  
けぬる

ソファにより烟草をのめばしみじみとけむりの  
すえにきゆるかなしみ

いとほしくわれをいたはるはかなさにしみじみ  
軒の雨だれをきく

海をみてけふのひと日はくらしけり明日といふ  
日はまた明日のこと

夜もすがらかたき枕をもてあましとつおいつし  
て波の音きく

逢はぬ日はまたあのことを母刀はと自じにいはれてや  
あらむ泣いてやあらむと

夜あけぬればあけぬればとてあてもなき望をか  
けてねむらむとする

おもひ泣く若きころをすかしつつあがつき暁をまつこ  
ころもどなさ

通  
ひ  
路

鳥飛べはきみかどぞおもひ風ふけばきみかどぞ  
おもふかなしき通ひ路

日はひねもす夜は夜もすがら通ひ路にまでどく  
らせどまでどくらせど

くべければさは嘆きそとしかれども若き心のき  
きわけもなき

何事ぞ今宵の胸のさはぎやう逢はで死なむとい  
ひしならぬに

さばかりのこと嘆かじとおもひきり草を摘めど  
も唄をうたへど

せむもなき思すてよとよする波千鳥はおもひき  
られすとなく

緑  
の  
丘

おもふまじせむなきことはおもふまじ旅はつれ  
なきものどさくから

紺の帯そがひにしめていそいそをどこに逢ひ  
にゆくやつばくろ

臆おそにより編あみ物ものをするかの少女肩のかなしさスノ  
ウドロツブ

白猫とジョウカアとでてたはむるる林檎畑の春  
の夜の月

かならずとまたこの子にも盟ひしぬきのふにつ  
づくあすならなくに

戀人はわがかたはらにつつましく紅き絲もて編  
物をする

湯の朝や足の爪きる指さきにコスモスちりて艶  
なるきみかな

ふくよかにネルのキモノの肌さはり性をなげく  
や紫のかげ

この春秋うみの母にも許さざるこの身この魂な  
りうつくしさ

あひびき

母の眼をぬすみてあひにくるひとのあはれや肩  
のこのほそりやう

たやすくは逢へぬ身なるをたまさかに逢へばひ  
たすらなきたまふきみ

白き手をわれにあづけてうつとりと海みるひと  
になにのうつれる

この指をこの白き腕をこの肌を刺すともきみは  
くやまじといふ

世の掟おきてやぶりて逢ひにこよといふ男の無理をお  
となしくきく

世の常の少女のごとくいつはりをいふきみなら  
ばすすてもゆかれむ



砂丘の墓

かへらじと徑みちのかたえにくづおれておさなきひ  
とは音にたててなく

砂丘すなをかにちいさき墓かぶのひとつあり幾世いくよ経へにけむ遠  
き海原うみはら

けふもまた濱なみの真砂まごにながながとわが足跡あしあとのつ  
づくあはれさ

あかあかと遠みさきき岬みさきにくれのこる夕日ゆふひの色いろをきみ  
もみたまへ

うろこ雲うろこぐも空そらいちめんにかみいづしづごころな  
ししづごころなし

薬指くすりゆびにそみし繪えの具ぐの紫むらさきのさみしきままに夕ゆふへと  
なりぬ

かの夏なつにわかれましたものをさいかちのいつか實み  
となりからからとなる

この身はもかの渚なづきはも岬さかはも太陽たいやうの火ひにひかる  
るごとし

太陽たいやうにとけてこの身も岡も泥どろとなれあはれかな  
しき草いきれかな

風のたより

死ぬ薬袂たもとにひめてなくといふ風のたよりもたえ  
てひさしや

母ははと娘むすめがささやかにすむかの濱にあはれさびし  
や夏なつきにけらし

寺てら詣まわり母ははのかへりのおそしとて「かきおき」がすか  
なしなき娘むすめ

つつましく白しろきふしごによこたはり手紙てがみをまて  
るむすめのいのち

松まつの木の皮かわをはぎつついひしことひとにつげそ  
といひしきみかな

母ははひとり娘むすめひとりすめるあけくれのさみしから  
まし白しろ粉こなの花

いつとなくわするるとなく文たえてあはれここ  
しの夏もいぬめり

なにかしてむかしのきみのおもひいづスホート  
ビーのさきそむるころ

さびしき路

みもはてぬかなしき夢はおもひすてゆく旅人  
誰かしらむや

ここの港かしこの町とわたりつつゆかばかなし  
きことも忘れむ

いつかまた逢<sup>あ</sup>阪<sup>ふ</sup>山のわたり鳥君<sup>とり</sup>おもひつつひと  
り越えゆく

さだめなく鳥やゆくらむ青<sup>あ</sup>山の青のさみしさか  
ざりなければ

さらばさらば野越え山越え旅ゆかむかなしき  
とは忘れてもまし

わかれてもわすれざれとは盟ふまじまだうらわ  
かきゆくすゑのため

旅  
愁

わすらるる身のいとしさかゆく旅のうらわびし  
さか涙ながるる

きみをみにはるばる伊賀の山を越え山城の國に  
いりしたそがれ

ゆふかけてきみが門邊をさまよふは螢なりしと  
きみにはつげよ

川岸につみかさねたる材木に身をなげかけてな  
げく若者

うす紅の小鹿の角をぬらすほど若草山にふる春  
の雨

つばくらが子に餌をやりてかへりゆくあとより  
かへる紺屋の手代

ちらちらと難波新地に雪ふれば人形遣がお泣や  
るものを



紅  
燈

雲をみてなにをかなしく泣くやらむぢつと子鹿  
の眼のうちをみる

そらどけしままにいつしか夏にいるそなたの帯  
かおれのころか

ぬぎすてし小袖のごとくうちしほれなきるき  
みにせまるたそがれ

いまははやきみもうらまじゆるやかに窓をなが  
るる煙草のけむり

「眩枕くらまくらすぐにまごろむこのきみは眠人形ねむりにんぎょうのたぐひ  
なるらむ」

袖屏風そでびやうぶはれがましやとたちまへばきみのだらり  
のなげく春の夜

しやなしやなご天神橋てんじんばしの反橋さかばしを喜蝶きてつがわたる春  
の晝かな

巷のうはさ

湯あがりの足の爪さる鈴の音にめさめしほごの  
あさき夢かも

いつしらす身は公園の腰掛に夜をまつ人となり  
にけらしな

はしたなき巷ちまたのひとの口のはにかひなくたたむ  
名こそおしけれ

いまごろはさぞや曲輪くろわのとりさをそなたもひ  
とにききてあるべし

いつしかにあさきうき名もたちけらし浮世うきよ新道しんみち  
夏のかはたれ

とぼとぼと灯のつく街のこひしさに橋のたもと  
にきはきつれども

とつおいつ紙屋治兵衛にあらねどもいつそこの  
まま死むでものけよか

花柳夜話

しくしくと涙ぐみたる灯がふたつ水に身をなげ  
ながれていねる

影繪船假聲遣のいふことにや  
「あはすいんではこのむねが」とぞ

辻褄つじづみのあはぬはなしもおもしろやかなのきぬぎぬ  
のうそのなみだも

かくばかり美しき子はみざりきとこの子にもい  
ひかの子にもいふ

いそいそとオーバシウスのふみ心地ぬれてかへ  
るもうれしききぬぎぬ

破れ三味線

しくしくとなきながらくる袖萩の絃のねじめか  
夜の秋雨

雪の日はゆふぐれかけて三味線のねにこそたて  
ねきみこひわたる

三の絲きれなばきれねつげばとてごうせそはれ  
る仲ちやないもの

夜の唄

この夜ごろ

ほんにおもへば昨日今日  
つんではくづすわが心。

夜は夜とて三味線の  
身もすてばちの三下り。



いふてせんないことなれば  
歌ふてのけよとおもへども。

夕化粧

いそいそと  
格子かぢのそとにししのびよる  
浮氣うきな夜よをまたせおき  
きみは化粧けいずいの手をやめて  
さしうつむけるなりはひを  
親おやの因果いんぐわと誰たれがしる。

帯

このきぬぎぬの  
せつなさを  
黒い<sup>まむし</sup>蝮の博多帯  
むすべばきゆつと  
泣くわいの。

悪縁

そなたばかりが  
女ぢやないが。

賣られてきた夜、人形を  
泣くなくだいてそひぶしの  
かみなりさまがこわいごと

より添ふたのが縁となり  
それなりけりになりけり。  
そなたばかりが  
女ぢやないが。

晩春初夏

なげた朱羅<sup>しゅら</sup>宇<sup>り</sup>にゆく春の  
鐘がなろうがなるまいが  
身もそらごけし晝夜帯  
いまさらごうまあむすばれ  
四の五のいわずときれさんせ

夏  
蟲

夜としなればとぼとぼと  
灯のつく街へ由良之助  
お前は夏の蟲かいな。

若き日の岡

夜は夜とて  
カアツチ、カアツチ、と木の頭  
幕のあくのをまつこころ。

晝は晝とて

三味線草に身をなげて

東京名所圖繪

あの夜の人をまつところ。

黒船

品川の  
お臺場だいばこそは悲しけれ。  
千年萬年まつたどて  
ごう黒船くろぶねのくるものぞ。



くわんのんさま

浅草の

くわんのんさまも あいそがつきませう。  
— ひとになさけはかけまいもの。

願ねがひのすじも今ははやござんせぬ、  
一錢がほど おかげをおくんなさい

ぶらりとさがつた大提燈か  
——わたしのころか。

(鳩に豆なんかやるのはおよし。)

わたしの鳩は  
まめをたべるとすぐかへりました。

### 柳屋繪草紙店

春だといふのに  
雪が降る。  
黒門町の繪草紙屋の娘の  
出来ごころな夢を  
そつとのぞきこむ  
浮氣な春の雪。

ちらり、ほらり  
歌麿の女の脛へ  
きえる淡雪。

素

ルナバアクの夏の夜は  
臺灣館の小娘の  
耳へとほした青い環。  
さてそのつぎの曲藝は  
ねらひすました白い刃が  
ひらりと飛んで季さんの

首をかすめて板へ立つ。

さて季さんはたちあがり

「わたしはなかなかしにません」

赤いカーテンがしづしづと

こころのまへに おりてゆく。

## 銀座裏

紺の蛇目に

うす日がさせば。

死んだ螢の襟あしへ

ひやりとおちるおくれ髪

わたしや輪廻がおそろしい。

白銀町の春

知らぬ女に

アスクしたいよな春の夜。

アメリカのオールドミツスに

ついてゆく

ニッポンのマンネムスメも

げらげら笑つてゐる。

孕んだ小犬が  
おどろいて逃げ出す。

主のない娘の九鬘を

浮氣な春の月がかいまみた。

でも氣にかゝる春の夜。

### 相乗り

更けし電車も、春の宵  
ならびてのればあぢもなの。

⑩ あたりでひつかけた  
ごふろくの酔が久松町のまはり角

爪  
彈

しんとろ 　とろりとでるほごに  
こくりこくりとしなだれかゝる。

「おまへさんも小指こさきににげられましたかい。

……これなくて……なんのおのれが……さくら  
かなつてな」

ほんにかはいいこの男。

美千登世

あの爪弾の  
美千登世に

つひつまされて  
ひく障子

影繪のやうな  
星の空



港のやうな春の街。

足にまつはる伊達巻の  
もつれた帯ならさけもしよが  
された縁ゆゑせんもなや。

江戸 櫻

しやんとむすんだ晝夜帯  
三十一のこの年まで  
いつかなとかぬ通りもの。  
うれしい若勞か「江戸ざくら」  
それとなけれど氣にかゝる。

はつ夏

くすぐつたいそよ風が  
うわきにちらつくネルの裙を  
朱羅宇でおさへたおもはせぶり。

青い眉のはつ夏。

含羞草

含羞草 又名 羞答草 豆科 含羞草屬 植物 葉子 觸之 即收 縮 故 名 含羞草 花 淡 紅 色 結 莢 實 生 於 南 方 地 區 喜 光 耐 旱 易 於 栽 植 其 葉 子 之 收 縮 是 由 於 葉 子 基 部 有 一 種 特 殊 的 細 胞 其 內 含 有 一 種 液 體 當 葉 子 受 到 觸 摸 時 液 體 即 向 葉 子 基 部 收 縮 使 葉 子 收 縮 故 名 含羞草

なみだ

まあかゝさんとしたことが  
あんまりぢやぞえ あんまりな。  
疊のうへにちるなみだ  
紅さし指へそとそめて  
「わしやしにたい」とかいたれど。

ふみ

行燈あんどうのかげに文ぶんかけば  
みにつまされて燈あかり心の  
泪なみだぐみたる灯あかりがゆらぐ。

こゝろがらにはあらねども  
わすれてたもとつひかいて

われと泣かるゝ 春の宵。

春の淡雪

しらぬわいなと  
うつたもと  
波に千鳥の緋ぢりめん  
ちらちら雪の降るけはひ。

丸  
鬚

春のあしたの湯のけむり  
ぬしのない子の丸鬚を  
ステインドグラスの番臺が  
これもやもめかちらとみた。

磁器國の唄



オキクサン

オランダ屋敷に

チャウチンがつけば

ロテのオキクサンが

いそくと

はにかみ草は窓のした。

玉蟲色の長椅子に  
やるせない袖うちかけて  
サミセン弾けば  
ロテもなく。

つばめ

「<sup>ひろしげ</sup>廣重の海」をはるばる  
くる燕。  
モチクテカキクテ  
シイウイとて  
泣きなき  
ムスメに逢ひにくる。

ネルのキモノ

異國のネルの肌さはり  
はつかしいよなこわいよな。

でもなつかしい春風が  
赤いふりからふくものを。

お寺の鐘

印度茶インディアナレッドの夕日は

しづやかにしづみゆく。

黒き老杉かしんの木の間へ

日本のお寺の鐘は

暮れよつの時をつくりぬ。

おさなきどち

戀人よ、  
いざ夕ゆふの祈いのり禱りせむ。

らくがき

ひとのうはさもたそがれの  
うすらあかりにおづおづと  
ふたりは壁のまへにたち  
その落書らくがきをよみました。

きみはなくななく袂たもとにて

その落書をけしました。

綾ごりをする少女

きみはカイロの<sup>て</sup>手品師か

白く華<sup>けし</sup>洒なる指をもて

赤い毛糸をつまぐれば

綾<sup>あや</sup>ごりかけごり水車

はてはべんべんことかいな。

指にからまる綾糸の

あはれはかなきわが心。

浦の菜園

わたしの親は實の親  
ついでわたしを憎まねど  
なせかわたしは氣がすまぬ。  
浦の菜園さいえんにてみれば  
今日も今日とてからからと  
さいかちの實のなりいづる。



毒芥賣の末の娘が  
赤い袋をやるといふ  
それもおほかたうそである。  
菜園のすみにころげたる  
ふたまた大根のろくでなし。

ふるさこ

山のうへから南をみれば  
どれが故郷の山ぢややら  
わしがかかさはおの山蔭で  
夜は夜もすがらギイトントン  
かあい娘のキモノを織ろと  
絲をつないでゐやるもの。

常夜燈

森のお小夜がとぼしたる  
山の出鼻の常夜燈  
わけて今宵はあかあかと  
父の船かやちらちらと  
なみだにうかびちらちらと。

母

夜は夜もすがら母うへは  
わたしのために靴下を  
ちくちく編むでゐらつしやる。

朝におろした靴下も  
晩には大きな穴があく。  
ゆふべとなればあかあかど

ラムブのもとに母うへは  
破れた穴をつぎながら  
唄を歌つてゐらつしやる。

母の情なさけのしみじみと  
破れた子供のころをも  
悲しい子供の涙をも  
ほごようふいてたもるもの。

うしなひしもの

わが願

ちひさき望をかけて夜をあかし  
ちいさき悔をおぼえて日をおくれり。

紅き窓より顔よき女いでて手招きすれど  
彼女がよぶは「われ」にあらずして

「男といふもの」なり。

わが心をわかつによしなし。

ともすればおかしき歌口にのぼれど  
ばちをさる子もなければ  
ほそほそと市のごよみにきえゆくなり。

のこれるもの

あの松原がわすられよか。

紫色の帯しめて

松にもたれてまつてゐた

あの娘の姿がわすられよか。

その松原はいまもある。

そしてその娘もこの俺も  
死なずに日本にゐるものを。

子守唄

(母を失ひし兒を父のうたへる歌)

吾子はよき兒ぞとくねむれ。  
母にや似たるもの怖れ  
泣くなや父はここにあり。  
浦の水車も草も木も  
みなおとなしく眠りつれ。  
そよぐは風の音なれや

なごおそろしきことあらむ。

泣くなよき子ぞとく眠れ。

軒の雀も巢にかへり、

小犬も母のふところへ

そろりとはいつてねたさうな。

● 吾子もよき兒ぞいざねやれ。  
なに悲しうてさは泣くぞ

父にや似けむよわき性

山の狐は母もなく

草葉のかげにねるといの。

そなたの床のうつくしさ

枕の蒔繪は揚羽蝶

布團の模様はさくら花

夜はしづかに眼をさちて

蕾のやうにねるものぞ

朝になれば日光のなかに



花のやうにも咲きいでよ。

よき子ぞいざやねむれかし。

そなたの好きな子守唄

さあさ歌ふてやるほごに。

……お城のうへの星の子か

南の海の椰子の實か

そなたをうんだる母が子ぞ

そなたをだいたる父が子ぞ……

あしたになれば町へいで  
でんでん太鼓も踊り子も  
繪本もかふてやるほごに。

夜咲く花目次

濱の旅館	五
通ひ路	九
緑の丘	三
あひびき	五
砂丘の墓	二
風のたより	五
さびしき路	九

旅	愁	三三
紅	燈	三七
菴	のうはさ	四一
花柳	夜話	四五
破れ	三味線	四七
夜の	唄	四九
この	夜ご	五一
夕	化粧	五三
帯		五五

悪	縁	五七
晩	春初	五九
夏	蟲	六一
若き	日の岡	六三
東京名所繪圖		
黒	船	六七
くわんの	んさま	六九
柳屋	繪草紙店	七一
青		七二

銀座裏	.....	七五
白銀町の春	.....	七七
相乗り	.....	七九
瓜彈	.....	
美千登世	.....	八三
江戸櫻	.....	八五
はつ夏	.....	八七
含羞草	.....	
なみだ	.....	九一

ふみ	.....	九三
春の淡雪	.....	九五
丸鬻	.....	九七
磁器國の唄	.....	
オキクサン	.....	一〇一
つばめ	.....	一〇三
ネルのキモノ	.....	一〇二
お寺の鐘	.....	一〇七
をさなきごら	.....	

らくがき	二二一
綾取をする少女	二二三
浦の菜園	二二五
ふるさと	二二七
常夜燈	二二九
母	二三一
うしなひしもの	
わが歌	二三五
のこれるもの	二三七

子守唄	二三九
-----	-----

大正二年十一月廿八日印刷  
大正二年十二月一日發行

定價金壹圓參拾錢

畫集  
(帶夜畫)

不許複製  
與付

著者  
發行者  
印刷者  
印刷所

竹久夢二

河本龜之助

東京市麹町區平河町五丁目三十六番地

河本俊三

東京市麹町區平河町五丁目三十六番地

千代田印刷所

東京市麹町區麹町二丁目九番地

發行所

電話番町四二五八番  
振替東京二〇九一四

洛

東京市麴町區  
陽堂  
平河町五丁目卅六番地

